
仮面ライダーSunshine

青い雷鳴（音速の中へ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーSunshine

【Nコード】

N6786W

【作者名】

青い雷鳴（音速の中へ）

【あらすじ】

記憶を失った主人公は桜高校という学校に転校することになった。

その学校や街では毎回さまざまな事件がおこり始める。

どうやら「ショッカー」という謎の組織が街の人間にモンスターSDというメモリーチップを配って街の人間を暴れさせている。

主人公はあることから自分の体の中に入ってしまった「ライダーバ

ツクル」にライダーSDをセットして仮面ライダーsunshin
eとして戦う。

全ての始まりの直前

あの頃からもう何年になるだろうか。

当時17歳だった俺は旅の途中に脳の病にかかってしまい意識不明になってしまった。

その後なんとか一命は助かったが意識を失う前の記憶が全く無く医師の話によると記憶がもどるかどうかは現段階ではわからないらしい。

その話を聞いた俺はもう何もやる気にならなくなり毎日病室のベッドでぐったりしているのが日常になっていた。

そんなある日のことだった。

一人の20代ぐらいの女性が俺の病室を尋ねて来た。

彼女の名前は「山中さおり」といいこの街にある桜高校という学校の校長先生だった。

病院の医師の話によると意識不明になった俺をこの病院まで運んでくれたのが山中先生だったらしい。

山中先生は俺に「記憶が戻らないし何をやらいたいのかかわからないなら、私の勤めている学校の生徒にならない？」と言った。

いきなりのことで俺はしばらく無言で彼女の顔を見ていた。

結局、彼女の誘いを受けた俺は明後日から桜高校の生徒になることが決まった。

少し未来に希望が見えて来た俺だったが明後日から行く学校で密かにおこっている事件を俺はまだ知らなかった。

それが俺の全ての始まりといわば戦いの幕開けだった。

第一話 謎の持ち物（前書き）

第一話は病院を退院した主人公が記憶を失う前に持っていた荷物を山中先生の家まで取りに行く話です。

荷物は大体旅に持っていくような物ばかりでしたが、一つだけ自分でも使い方がわからない持ち物がありました。

果たしてその持ち物はいったいどんな物なんでしょうか？

第一話 謎の持ち物

病院を退院した俺はまず最初に明後日からお世話になる学校の教師である山中先生の自宅へ向かった。

道は地図をもらっていたのであまり迷わずにスムーズに目的地に着くことができた。

呼び鈴を押すと一分もしないうちに家の戸が開き、俺は家の中へと引っ張り込まれた。

家まで俺を呼んだ理由は意識不明になる前の俺の持ち物と明日から通う学校の制服などを渡すためだった。

俺が持っていた持ち物は財布に免許証その他は旅先の土産のようなものだった。

ところが一つ気になる持ち物があった。それは何か機械のような物だった。機械の真ん中にはカメラのレンズのようなものが付いていて、他には何かを読み込ませるようなカードを入れる穴があった。

俺は先生に「この機械、何に使うか知りませんか？」と聞いた。

すると先生は「私にもわからないけどあなたを見つけたときあなたはそれを手に持っていたのよ」と言った。

結局このときはこの機械が何の役に立つかはわからないままだった。

第一話 謎の持ち物（後書き）

仮面ライダーSDを読んでもくれた人ありがとうございます。

第2話は転校したばかりの主人公が学校でおこっている謎の怪事件を調べるお話です。

果たして主人公は事件の謎を解けるのだろうか？

続く

第二話 仲間（前書き）

転校生として桜高校に通い始めた主人公。

初日から数多くの仲間ができるがこの学校で一週間前からおこっている失踪事件のことを知った主人公はこの学校の調査を始める。

第二話 仲間

あの謎の持ち物を受け取ってから1日が過ぎた。

今日から俺は桜高校の生徒となった。初日はまだ学校の場所がよくわからなかったため山中先生と一緒に登校することになった。

こうやって学校に登校するのはなんだかかなり久しぶりのような感じがした。

20分ぐらい歩くとやっと校門が見えてきた。校門を通った俺は少し不振なことに気が付いた。

どの運動部もグラウンドに出て練習をしてなかったのだ。

俺は山中先生に「この学校の運動部は朝練は無いんですか？」と聞いたすると山中先生は俺にしか聞こえないぐらいのヒソヒソ声で喋り出した。

先生の話によるとこの学校では一週間前からそれぞれの運動部のエースにあたる生徒達が1日に一人かならず失踪するという事件だった。

校舎に入ると廊下の壁にそれぞれの運動部のエースの子の顔写真がはられてあった。

廊下を少し行くと2年C組の前で山中先生が足を止めた。どうやらここが俺のクラスらしい。

最初に山中先生が教室に入った。それから5分後ぐらいに先生に呼ばれ俺が教室に入るとクラスのみんなは盛大な拍手で俺を迎えてくれた（この学校はどうやら転校生が珍しかったようだ。）

教卓の前で軽く自己紹介を済ませた俺は先生に言われた席に向かった。席に座ると回りの子が色々俺に話かけてきてくれた。

特に俺の左隣りの子はすごく俺に優しくしてくれた。彼女の名前は「平島唯」部活は軽音部らしい。今の所、文化部の生徒は誰一人失踪してなかったのでひとまず安心した。

昼休みに俺は唯に引っ張られ軽音部の部室で弁当を食べることになった。最初は二人つきりで食べていたがそのうち他の軽音部の子たちもやって来た。

ここでも俺は色々と質問された。（どうやらホントに転校生が珍しいらしい）

それから5分後ぐらいに一人の男子が入って来た。

この男子の名は「服部雅彦」はっとりまさひこ軽音部ファンクラブの会長らしい。服部は俺に「お前、俺の女神達に何気安く喋りかけてんだ」かなり甲高い声に俺は一瞬ビビってしまった。

それから服部は俺に軽音部のみんなの名前を教えてくれた。

左から「秋原滂」「琴野紬」「中霧梓」「田ノ宮律」そして俺の隣の席の「平島唯」軽音部はこの5人で活動しているらしい。

昼休みの途中、山中先生に呼ばれた俺は校長室に向かった。そこでまた俺は失踪事件の新たな情報を手に入れることになる。知

らずに……

第二話 仲間（後書き）

主人公の仲間を紹介します。

桜高校校長「山中さおり」

軽音部5人

部長「田ノ宮律」2年生

部員「秋原滯」2年生

部員「琴野紬」2年生

部員「中霧梓」1年生

部員「平島唯」2年生（主人公にとって重要な存在）

ファンクラブ会長「服部雅彦」2年生

これからもキャラクターを徐々に増やして行くつもりです。

第三話 変身（前書き）

失踪事件の被害者の中に唯の妹がいることがわかった主人公。

失踪現場となっている校門付近を調べていると黒い覆面を被った男達に生徒がまた一人誘拐された。

やつらの後を追う主人公だったがやつらに尾行がバレ囲まれてしまう。

第三話 変身

校長室に行くと山中先生が一枚の紙を俺に見せてくれた。

そこには例の事件で失踪した生徒の名前が書かれていた。

その紙を見た俺はその中の一人に目をやった。

「平島憂」一年生2日前に失踪。

俺「この子もしかして唯の妹ですか？」

山中先生「彼女は平島さんの妹よ。あの姉妹は本当に仲がよくてね
」

山中先生は平島家のことに付いて語り始めた。

唯の家は親が二人とも仕事の関係でずっと海外に行ってるらしく姉妹二人で仲良く生活してたらしい。

俺はまたその紙に目をやった。すると生徒達が消えた場所が全員校門付近だということがわかった。

それから午後の授業が終わり放課後になった。

俺は校門付近で何がおきるかを見ていた。

やがて一台のトラックがやって来てその中から黒い覆面を被った男が5人今校門を出ようとした生徒を捕まえトラックに乗せてしまった。

俺はその生徒が少し抵抗している間にやつらのトラックの屋根にしがみついた。

トラックは走りだした。

走ること15分ぐらいが経過した。

そのトラックは採石場に止まった。捕まった生徒が採石場の奥に連

れていかれる。

後を追おうとする俺は覆面の男達に気づかれ囲まれてしまう。

抵抗したがどうやら格闘技はやつらの方が一枚上ようだ。その上5対1では完全に俺が不利だ。

俺「ちくしょう」

覆面の男「ショツカーの計画を見た以上悪いがここで死んでもらう」
やつらはナイフを俺に向け振りかざしてきた。

俺「くっ：やられる」だがそのとき不思議な現象がおきた。

気がつくと俺は眩しい光に包まれていて俺の頭にイメージが入り込んできた。

そのイメージによると誰かが腰にベルトを付けて戦っていた。そのイメージを見て俺はハッとした。

そのベルトというのがあの俺が持っていた謎の持ち物だったからだ。俺はそのイメージ通りその持ち物を自分の腹部にあてるとその持ち物が俺の腹に吸い込まれていったのだ。そして気がつくと俺は3枚のSDカードぐらいの大きさのカードを手を持っていた。

俺はそのカードの中の一枚「ライダー」と書かれたカードをベルトにセットした。

すると俺の体が光に囲まれ気がつくと俺は「変身」していた。

これが俺の初めての「変身」だったのだ。

第四話 戦いとエースと家探し（前書き）

変身した俺は自分の力に手間取いながらも覆面男達を倒した。

その日の調査を終えて学校に戻った俺は仲間達と喫茶店に行くことになった……

第四話 戦いとエースと家探し

変身をしてしまった俺はまだ自分の力がどれほどのものかわからなく戸惑いながらも覆面男達の攻撃をかわしていた。

しかし攻撃をかわすだけではやつらには勝てない。

そこで俺はやつらの一人に思いっきりパンチをお見舞いした。覆面男は「イー」と叫びながら吹っ飛んだ。

次に俺は体に力をいれるとベルトから蒸気が放出されそれが衝撃波になり覆面男達を一気に吹っ飛ばした。

倒した覆面男達は煙のようにその場から消えてしまった。

さっき捕まった生徒を助けようと思ったがもうそこには生徒の姿はなかった。

俺は採石場をあとにして一度学校に戻ることにした。

学校に戻ると服部雅彦が俺に話かけてきた。

服部「お前どこ行ってたんだ？」

俺「ちよつと用事でな。服部こそこで何してるんだ？」

服部「今から軽音部のみんなと喫茶店に行くんだ！！わ」

服部は酷く興奮しておりどうすることもできなかった。

服部「お前も連れてってやってもいいけどな」

どうやらついて行くしかないようだ。

断ったら何されるか想像も付かない！

しばらくすると軽音部の5人がやってきた。喫茶店まで行く途中も相変わらず服部は上機嫌であった。

喫茶店に着くと高校生らしいお話タイムが始まった。みんなと話せる時間は俺にとってもかなり貴重な時間になった。

それからしばらくして喫茶店に入って来た客がいた。

その客は俺達と同じ学校の制服を来ていた。服部はその生徒に声をかけた。

「おい糸川。お前もコーラ飲みに来たのか？」
「どうやら生徒の名前は「糸川」というらしい。」

服部の話では糸川君はバスケット部のエースで軽音部ファンクラブの会員でもあると俺に自慢するように話した。

しかし、俺は嫌な予感がした。何故なら糸川君はバスケット部のエースと言うからだ。

つまりやつらに狙われる確率がきわめて高い。

喫茶店を出ると俺は糸川君に失踪事件のことを話した。

すると糸川君は俺にこう言った。

糸川「心配してくれてありがとう。でも僕は狙われないから大丈夫だよ。」

糸川君は笑顔で俺にそう言った。

だが俺は彼のその笑顔に何故か疑問を抱いていた。

糸川を見送ると唯が俺に話かけてきた。

唯「そういえば家どこなの？」

俺はその質問に呆然としながら言った。

俺「俺の家ってどこなんだろう？」

その答えにその場の空気が一瞬凍えてしまった……

第四話 戦いとエースと家探し（後書き）

今日は軽音部のファンクラブのことに付いて説明しよう。

軽音部のファンは学校にかなりいるらしくかなりのものらしい。服部会長の役目はそんなファン達をまとめたり軽音部のライブチケットを売ったりしているらしい。（軽音部のみんなは別に彼にチケットを売ってくれとは言っていないみたいです）全くとんでもない会長だ。

第五話 クモ怪人の奇襲！（前書き）

唯の家に泊まることになって野宿をまのがれて安心する主人公。

唯に頼まれ買い物に行く主人公だがその帰り道にクモ怪人に襲われてしまう！

主人公はクモ怪人の攻撃をかわすことができるのだろうか。

第五話 クモ怪人の奇襲！

結局その日は唯の家に泊まることになった。

夕飯の材料を買うために俺は一人近所のスーパーに向かっていた。

買い物を終えてあと少しで唯の家というところでいきなり俺の首に何かが巻きついてきた！！

それはかなり太い蜘蛛の糸だった。

その糸は電信柱の上のクモ怪人が口から出した糸だった。

クモ怪人「転校してきたばかりで事件に首を突っ込むとは生意気な転校生だ」

俺「捕らえた生徒はどこだ！」

クモ怪人「それをお前が知る必要はない。お前はここで死ぬのだ！！」

そう言うときクモ怪人は糸を引っ張り始めた。

このままでは窒息死してしまう！

俺は腹部に手をあてるとベルトを出現させた。

俺「変身！！」

光に包まれ変身が完了した。

俺は腕に全エネルギーを集中させクモ怪人の糸を引きちぎった。

クモ怪人「おのれゝ 小癪な転校生だ。まさか変身できるとはなゝ」
俺はクモ怪人が油断してる隙にやつの顔面にパンチを決めた。

クモ怪人「お前はまだ生かしといてやる。今度あったときが貴様の最後だ！フハハハ」

不気味な笑いを残しクモ怪人は去っていった。

家に戻ると唯がリビングで料理を作っていた。

俺「料理はいつも唯が作るの？」

唯「いつもは妹の憂が作るんだよ。家事は全部、憂がやっててくれたんだ。」

そう話している唯の顔はどこか寂しそうだった。

俺「憂さんは運動部に入ってたの？」

唯「ううん、憂は帰宅部だよ。」

このときまた一つの謎が増えた。

どうしてクモ怪人は運動部に所属していない憂さんまで狙ったのか？

そしてもう一つ何故クモ怪人は俺が転校生だと知っていたのか？

この二つの謎が俺の頭から離れなかった。

唯「憂は帰って来るかな？」

俺「大丈夫だよ。必ず帰ってくる。だから元氣だせよ。」

唯「どうしてそう言いきれなの？」

俺「知り合いにすごく強くて頼りになるやつがいるんだ。」

唯「誰なの？服部君？」

俺「うーんあいつは頼りになると言うよりうるさいだけだな」

そう言うとき唯はツボにはまったのか、笑ってくれた。

（唯心配するな。捕らわれた生徒は必ず俺が「仮面ライダー」が助
けだよ）

俺はそう心に誓ったのだった。

第五話 クモ怪人の奇襲！（後書き）

仮面ライダー sunshine の能力を説明します。

パンチ力 10トン

キック力 15トン

ジャンプ力 ひとつ飛び50メートル

足の速さ 100メートルを4、2秒で走る。

必殺技

sunshine エクスプロージョン

メガ sunshine など

第六話 クモ怪人の正体（前書き）

朝学校に着くと主人公の下駄箱に手紙が入っていた。

どうやら糸川がクモ怪人らしい怪しい影を例の採石場で見たという。

放課後、糸川と採石場に迎う主人公であった。

第六話 クモ怪人の正体

次の日学校に着くと俺の下駄箱の中に一通の手紙が入っていた。

宛先はバスケ部のエースの糸川君だった。

手紙によると「失踪事件について少しわかったことがあるから放課後、校門で待っていてくれ」とのことだった。

放課後になり校門で待っていると5分もしないうちに糸川君が来てくれた。

糸川「昨日クモみたいな化け物が採石場の方に行くのをみたんだ。

俺「本当かい？」

糸川「間違いない。あの採石場の奥には洞窟があるって言う噂だよ。」

（もしかしたらその洞窟にみんなはいるかもしれない）と思った俺は糸川とその採石場にむかった。

採石場に着くとまたこの前の黒い覆面の男達が襲いかかってきた。俺は糸川君を守りながら覆面の男達を次々と倒しなんとか洞窟の入り口までたどり着いた。

洞窟の奥には俺の思った通り失踪した生徒たちが蜘蛛の糸で縛り付けられていた。

俺「糸川君、早くみんなの糸をほどこう。」

糸川「フッフ、それは出来ないなあ。」

俺「どうということだ？まさか君が彼らを失踪事件に見せかけここに拉致してたのか？」

糸川「僕にとって彼らは邪魔なんだよ。僕が学校で一番のエースになるためにはね。」

俺「じゃあ何故、唯の妹まで拉致した？彼女は運動部じゃないはずだ。」

糸川「彼女を捕まえれば唯ちゃんは悲しむ。そこで僕が彼女を支えればファンとしての僕の好感度もあがるからねえ」

俺はそれを聞いた途端怒りで体が震え上がった。

俺「糸川！！お前だけは許さん！！」

糸川「僕を止めれるの？ただの人間の君に？」

そう言うとき糸川はスクールバックからバックルとSDメモリーを取り出した。

糸川はバックルを腰に巻くとバックルにSDメモリーを差した。するとやつの体が昨日俺を襲ったクモ怪人に変わった。

クモ怪人「さあ、ショッカー戦闘員よ。かかれー」

するとやつのバックルが光り例の覆面男達が数人現れた。

俺「お前はさっき俺のことをただの人間と言ったな。だがそれは違う。」

俺はそう言いながら腹部に手をあてた。

ベルトが出現した。

俺「何故なら俺は：「仮面ライダー」だ！！」

俺は変身した。

クモ怪人を倒し、みんなを自由にするために。

第六話 クモ怪人の正体（後書き）

クモ怪人の野望

クモ怪人は自分が学校で一番目立ちたいと言う理由でそれぞれの運動部のエースを拉致していた。

唯の妹憂を拉致したのは自分をもっと頼ってほしいという実に自分勝手な考えだ！

第七話 ライダーVSクモ怪人（前書き）

変身してクモ怪人に立ち向かう仮面ライダー sunshine。

クモ怪人の卑怯な手をかわしやつの野望を打ち砕け！！

第七話 ライダーVSクモ怪人

仮面ライダーに変わった俺はまずショッカー戦闘員を軽く撃破すると採石場の方へ逃げて行ったクモ怪人を追った。

ライダー「逃がさんぞ！」

俺はクモ怪人の行く手を阻むとクモ怪人は昨日のように口から糸を吐いて俺を縛り上げようとした。

糸は俺の手と足を縛り上げた。

クモ怪人がどんどん迫ってくる！

俺は体のエネルギーをベルトの中心に集中させた。

ライダー「sunshineフラッシュュ！！」

クモ怪人「ぐあああ、眩しい」

今度はこっちの番だ。俺はベルトのよこに付いている「SDロード」にSD「ソード」を読み込ませた。するとSDロードが剣に変わった。クモ怪人はまた糸を飛ばしてくる。

俺はその糸を剣で切りまくっていく。

クモ怪人を切りつけていく俺にクモ怪人は2つ目の武器である「毒針」を口から出してきた。

だがやつのその攻撃も俺には効かなかった。俺は毒針の一つ一つを

剣で跳ね返していたのだ。

クモ怪人「クソー！！貴様には何も効かんのかー」

ライダー「俺はお前なんかには負ける訳にはいかない！！だからどんな攻撃にも絶えてみせる！！！！」

俺はクモ怪人をまた切りつけて行く。

かなり弱ってきたらしい。

俺は剣をSDロードに直すと最後のSDメモリーである「ライドアップ」を読み込ませた。

SDロード「sunshineエクスプロージョン」

俺は空高くジャンプすると右足に全エネルギーを集中させた。

ライダー「sunshineエクスプロージョン！！」

見事なほどの飛び蹴りがクモ怪人のバックルに決まった。

バックルが碎けクモ怪人は爆発した。

クモ怪人から糸川に戻ったのだった。

俺はやつのモンスターSDをとると洞窟に監禁されている生徒を助け出した。

監禁されていた生徒達は次の日から学校に来るようになり失踪事件は無事に幕を閉じた。

糸川は三週間の停学処分と服部会長のお説教（5時間）をくらって

いた。

そして昼休みに軽音部の部室に迎った。

みんなはいつものように俺を迎えてくれた。約束を守った俺に唯は言った。

唯「妹を助けてくれてありがとう」

その言葉は俺にとってすごく暖かくて何より嬉しかった。

服部「お前がみんなを助けたのか。まあ俺の方がそれ以上にすごいことしてるけどな」

相変わらずの服部であった。

だがショッカーとの戦いはまだ始まったばかりなのだ。

戦え!! 仮面ライダー sunshine

第七話 ライダーVSクモ怪人（後書き）

モンスターSDについて。

モンスターSDはライダーSDと違い怪人が使うメモリーチップである。

モンスターSDをコンピューターにかけるとそのSDのデータが見えるんだ！

ライダーの「ライドアップ」をくらくとそのモンスターSDの変身能力は破壊され二度と怪人になることは出来ない。

第八話 寮に迎え！（前書き）

失踪事件が終わり一週間が過ぎたころ学校では原因不明の病気が流行り出していた。

それも学校の寮に住んでる生徒たちだけが次々と学校を休んでいる。

主人公はその原因をつきとめるため寮に迎う。

第八話 寮に迎え！

失踪事件解決から一週間が過ぎた。

あれから相変わらず自分の家がわからなく俺は今も平島家に居候している。

憂「おはよう。朝食が出来てるよ」

俺「なんかすいません。もう一週間も泊めてもらっちゃって」

憂「いいんですよ。お姉ちゃんと私だけじゃちょっと心細くて。」

俺「そういえば唯はどうしたの？」

憂「お姉ちゃんは今もう学校に行ったよ。今日は朝から新曲を聴かせたい人がいるって」

俺は忘れていた。

今日は朝から軽音部の新曲を聴く約束を唯としていたことに……

俺は朝食を急いで食べ後の支度を終わらせると学校に向かって猛スピードで走り出した。

学校に着き軽音部の部室に入ると丁度演奏が始まる前だった。

どうにか間に合ったようだ。

演奏を聴いていると俺の隣でいきなり叫び出すがいた。例のファンクラブ会長の服部だった。

服部「軽音部サイコーだ。ムギちゃんこっち向いてくれ」
やれやれ勘弁してくれよ。

演奏が終わると部長の律が俺に感想を聞いてきた。俺が答えようとする。

服部「めっちゃくちゃよかったぜ」

俺「おい！服部！！律は俺に聞いてるんだぞ。何故お前が答える？すると服部は言った。

服部「はあゝ何が？」会話が成り立たん！！

律「そういえばまたこの学校事件がおきてるみたいだね」

俺「どんな事件なの？」

律「まだ事件かどうかはわかんないんだけど実はね」

そう言うとき律は静かに話始めた。

律の話ではどうやらこの学校では原因不明の病気が流行っているらしい。

それも何故かこの学校の寮に住んでいる生徒だけがその病気にかかっているらしい。

服部「そいえばお前はなんで寮に入らないんだ」

俺「山中先生に聞いたところにはもう満室みたいなんだ。」

唯「いいじゃん。私の家にずっといれば」

俺「流石にそれは迷惑だろ？」

唯「全然」

俺「まあとにかくその寮に行ってみるよ」

律「頼むよ。期待の転校生！」

服部「俺もしょうがねえから着いてってやるよ！」

こうして俺と服部は放課後に学校の寮に行くことになった。

俺はそのときから既に嫌な予感がしていた。

それはまたシヨッカーの仕業かもしれないと。そしてまたこの前のように怪人と戦わなくちゃならないと。

授業が終わり放課後になり俺と服部は例の寮に迎った。

そこで想像以上のことがおきてると知らずに。

第九話 蝙蝠怪人の出現！（前書き）

寮に着いた主人公と服部は一人一人の部屋をノックするが誰一人応答せず、寮は不気味なほど静まり返っている。

最後に寮の係員である「黒太」（三年生）の部屋の戸をぶち破る服部。

その奥で主人公が見た物は：

第九話 蝙蝠怪人の出現！

寮に着いた俺と服部はまず寮に住んでいる生徒に話を聞くため一人の部屋をノックした。

しかしどの部屋も応答はせず寮の中は不気味なほど静まり返っていた。

服部「こうなったら戸をぶち破ろうぜ」

俺「それはさすがにマズい！もしも本当に病気で寝てたらどうすんだ？」

服部「じゃあどうするんだ？このまま尻尾まいて帰るのか？」

俺「とにかく管理員の部屋へ行ってみよう。」

管理員は三年の先輩の「黒太」先輩で部屋は2号室だ。

2号室に行きノックをするがやはり応答がない。

そのときとうとう服部様がやけをおこし始めた。

服部「もう我慢の限界だ！ぶち破るぞ」

そう言うとき服部は2号室の戸をぶち破ってしまった。

部屋の中に入るとそこには他の部屋の生徒が全員いて死んだ魚のような目でこっちを睨んでいた。

服部「なんだ？てめゝら俺とやる気かゝ」

俺「よせ服部！相手を刺激するな。この人達は…」

だが遅かった。生徒達は皆手にナイフや金属バットを持ってこっちに迫ってきた。

服部「おもしろゝやる気だなゝ」

俺「馬鹿！とにかく屋上に逃げるぞ！」

俺と服部は屋上に続く階段を駆け上がると屋上の戸を閉め生徒達が来れないようにした。

だがそこで俺達を襲ってきたやつがいた。ショッカーの新たな怪人だった。

俺「また誰かがモンスターSDを使ったのか！」

蝙蝠怪人「俺の名はコウモリ怪人だ！この寮の状況を知られたからには死んでもらう！」

服部「ばば化け物だゝ」

服部はそう言うと言いついてしまった。

蝙蝠怪人は俺に飛びかかってきた。蝙蝠怪人は俺を掴むと空高く飛んだ。

蝙蝠怪人「くくっ、こっから落ちて死ねー」

そう言う俺は真っ逆様に落とされた。

落ちる際に俺は腹部に手をあてベルトを出現させポケットにいれていた「ライダーSD」をベルトに差した。

俺「変身!!」

前のように光に包まれ変身が完了した。

俺はそのまま屋上に着地すると旋回して俺の方に飛びかかってきた蝙蝠怪人に蹴りを入れた。

蝙蝠怪人は蹴りが当たった左腕を抑えながら飛び立っていった。

俺「なかなか手ごわいやつだな」

俺はそのとき確信した。この寮の生徒達は蝙蝠怪人になんらかの方法で操られていることに。

俺は服部を起こし寮の生徒のうちの一人 血を少し取ると寮を後にした。

第九話 蝙蝠怪人の出現！（後書き）

蝙蝠怪人について

蝙蝠怪人は蝙蝠だけに空中戦が得意だ！

果たして仮面ライダー sunshine は蝙蝠怪人をどうやって倒すのであろうか？

第十話 化学部の優等生（前書き）

寮の生徒の血液を化学部員である「真宮和」に調べてもらおうことになった主人公。

化学部を出ようとすると主人公は寮の管理員である「黒太」先輩に出会うのであった。

第十話 化学部の優等生

寮を後にした俺と服部は一旦学校に戻ることにした。

俺達が学校に着いたときはまだ部活動が行われてる時間帯だった。

俺はひとまず寮の生徒から採取した血液をどうにかするため山中校長に相談しに行った。

すると山中校長は校長室にはいなかった。他の先生に尋ねるとどうやら山中校長は軽音部の顧問らしい。

軽音部の部室に行くと山中先生は机に座ってケーキを食べていた。

俺は山中先生に採取した血液を詳しく調べれるところは無いかと聞くとこの学校の化学部を進めてくれた。

さっそく化学部の部室に行くと一人熱心に顕微鏡を覗いている女子生徒がいた。

彼女の名前は「真宮和」（まみや のどか）2年生で化学部の部長であり生徒会の副会長でもある。そして唯の親友でもあることを俺は知った。

和「君が噂の転校生ね。私に調べてほしい物があるって山中先生から聞いてるわ」

俺「実はこの血液なんですけど。調べられますか？」

和「うん。大丈夫よ。じゃあ1日あたり時間をちょうだい。他にも色々調べてることがあってね」

俺「じゃあ、お願いします。」

そして俺が化学部を出ようとするすると部室に一人の男子生徒が入ってきた。

それは例の寮の管理員である2号室の「黒太」先輩だった。

先輩もどうやら化学部のようだ。ところがどういうわけか黒太先輩は左腕を怪我していた。

俺「その怪我どうしたんですか？」

黒太「今日ちょっと体育の時間にハマしちゃってね。」

俺「早く治るといいですね」

そう言う俺は化学部を後にした。
校門では唯が俺を待っていた。

俺「もしかして待っててくれたの？」

唯「うん。ちょっと聞きたいことがあって…」

聞きたいことというのはどうやら今俺が欲しがっているものが無いかという話だった。

俺「うーん特に無いかな」

唯「えゝそれじゃ困るんだよゝ」

俺「なんで？」

俺がそう質問すると唯は無言でうつむいてしまった。

俺はなんとか唯の元気を取り戻そうと何かいいものはないかと辺りを見回すとちょうどアイスクリーム屋があった。

俺「唯、アイスでも食べないか？俺が奢るから…」

何故か俺は少し照れていた。

それを聞いた唯はすごい嬉しそうな顔をして目を輝かせていた。

はあゝなんとか機嫌は直ったようだ。

それにしても俺なんか変なこと言ったかなゝ。

考えても全然わからん！！

これははつきり言って学校でおこる事件を探るより難しいかもしれない！

第十話 化学部の優等生（後書き）

仮面ライダー sunshine の能力その2

視力 7キロ先の物体をも見ることが可能

聴力 自分の周りの5キロメートル先の音を聴きとることもできる。

第十一話 怒りの変身（前書き）

検査の結果によると寮の生徒の血液の中にはウイルスがいた。
ワクチンを作るには蝙蝠怪人を倒しやつのSDを奪うしかない。

第十一話 怒りの変身

結局あの後、唯の機嫌は直ったが何故唯が機嫌を損ねたかは全くわからないままだった。

学校に着くと教室で和が待っていた。

どうやら血液の結果が出たらしい。

化学部の部室に行くと和が顕微鏡を見せてくれた。

するとその血液の中で微生物のような物が動いていた。

俺「これはいったいなんなんだ？」

和「簡単に言うとウイルスよ。恐らく寮の生徒達はこのウイルスに操られている」

俺「ワクチンは作れないの？」

和「今の段階じゃ情報が少なすぎてわからない。」

どうやらワクチンを作るには蝙蝠怪人のSDメモリーを破壊するしかないようだ。

そう考えてるうちに午前の授業が終わるとしていたとき校舎ないにナイフや金属バットを持った生徒達が押し寄せてきた。

それはまぎれもなく寮の生徒達だった。

このせいで校舎内はパニックになり生徒は逃げ回っている。

俺は操られている生徒達を止めるために学校内を駆け回り蝙蝠怪人を探した。

だがどこを探しても蝙蝠怪人はいない。

そんなとき俺の携帯電話が鳴った。

服部だった。

電話に出ると服部は早口で言った。

服部「あのときの蝙蝠野郎が唯ちゃんを人質に取って屋上にいる！あとは頼んだぜ」そう言うと服部は携帯を切ってしまった。

俺は全速力で階段を駆け上がり屋上の戸を開けた。

だがそこにいるのは蝙蝠怪人では無く腰にショッカーバックルを付けた黒太先輩だった。

俺「黒太先輩！！SDを捨てろ！自分を見失うな。」

黒太「黙れ！！お前に何がわかる？俺はこのSDの力でこの学校の全生徒を操ってみせる！！」

俺「そんなことはさせない！」

黒太「君は俺に手を出せない！こっちには人質がいるんだ。」

そう言うと黒太は唯を掴むと唯の首筋を見せてきた。

なんと唯の首筋には蝙蝠の牙のあとが付いていたからだ。

黒太「この女はお前の役に立ちたいと自ら俺の前に来たんだ。ホン

ト馬鹿な女だ」

黒太に捕まれてる唯は目をつぶっていて意識を失っていた。

俺「悪魔に取り付かれた愚か者！！今ここで貴様の息の根を止めてやる！！」

黒太は唯を離すとバックルにSDをセットした。

黒太は蝙蝠怪人になった。

俺もバックルにSDをセットし力強く叫んだ。

俺「変身！！」

俺の体が仮面ライダーに変わった。

学校の生徒のため負ける訳にはいかん！！

そして蝙蝠怪人に噛まれた唯のためにも！！！！

第十一話 怒りの変身（後書き）

蝙蝠怪人について

蝙蝠怪人の正体は寮の管理員の黒太だった。

やつの狙いは桜高校の全生徒を蝙蝠ウイルスで自由に操ることだった。

第十二話 ライダーVS蝙蝠怪人（前書き）

学校の屋上で蝙蝠怪人との決着のときがきた！
やつを倒し操られている生徒達を守れ！

戦え！仮面ライダー sunshine！！

第十二話 ライダーVS蝙蝠怪人

蝙蝠怪人は空高く飛ぶと前のように俺に飛びかかってきた。

どうやらコイツは空中戦が得意のようだったが俺は空を飛べない。

蝙蝠怪人に勝つにはまずやつの羽をへし折るしかないようだ。

俺はSDメモリー「ソード」をSDロードに差し込むとSDロードが剣に変わった。

俺は体の全エネルギーを目に集中させ蝙蝠怪人の羽を調べた。

するとやつの羽には一本一本細かい筋のような物があるのがわかった。

俺はやつが旋回してこっちに飛びかかってくる瞬間を狙った。

蝙蝠怪人「ライダーお前はどうかやら空中戦が苦手なようだな。次で最後だ!!」

蝙蝠怪人が旋回してきた。

ライダー「ここだ!!」

俺は飛びかかってきた蝙蝠怪人の片方の羽を切断した。

片方の羽を切られた蝙蝠怪人は苦しみながらもまた飛ぼうとしている。

ライダー「諦めの悪いやつだ！だがこれで終わりだ」

俺はクモ怪人を倒したときのようにSDロードに「ライドアップ」SDをセットした。

ライダー「くらえ！！」

sunshineエクスプロージョン！！」

俺が放ったキックは蝙蝠怪人の背中にヒットした。

ライダー「貴様の悪事もこれでチェックメイトだ！」

蝙蝠怪人は爆発し、SDを奪うと怪人はもとの黒太に戻っていた。

俺も変身を解除すると唯を担いで化学部にSDを届けに行こうとしたとき屋上の戸が開き服部が駆け込んできた。

服部は気を失って倒れている黒太を何回も踏み続けながらこう言った。

服部「よくも俺を襲ってくれたな。これでどうだ」

服部は前より更に激しく黒太を踏み続けていた。

化学部に行きコンピューターに蝙蝠怪人のSDを読み込ませるとやつのウイルスのことが詳しく書いてありワクチンを作ることになった。

和と俺は寮の生徒達にワクチンを注射した。

一時間もすると生徒達は元に戻り血液からもウイルスは消えていた。

だが蝙蝠怪人に噛まれた唯はワクチンを使ってもなかなか目を覚まさない。

俺はいつの間にか保健室で寝ている唯の手を両手で握っていた。

俺「なんでこんな無茶したんだよ……」

俺がそう呟くとなりにいた和が言った。

和「唯は一つのことに集中するとその他の周りが見えなくなっちゃうのよ。昔からそうだった。」

俺「でもなんなんですか？その一つの事って」

和「あなたを守りたかったんだと思う。」

その後、俺はしばらく何も言えなかった。
俺はなんでわからなかったんだろう。

俺が悔やんでいると唯が目を覚ました。

俺は安心した。

俺「体は大丈夫か？どこか痛い場所とか無いか？」

唯「うん。大丈夫だよ。迷惑かけちゃったね。助けになるつもりだったのに」

俺「やっぱり今の俺には欲しい物は無いよ」

唯「そうなんだ。私が今あげれる物は何も無いんだね」

唯はまたうつむいてしまった。

俺「でも、失いたくない物はある。」

唯「何？」

俺「君だ。俺は唯を失いたくない！だからもうこんな無茶はしないでくれ！」

妙に声に力が入ってしまった。

唯の顔が何故か赤かった。

俺は和に尋ねた。

俺「もしかしてまた変なこと言っちゃいました？」

和「変なことは言っていないけど……良いことを言ったかもね」

やはり俺はわかんなかった。

第十二話 ライダーVS蝙蝠怪人（後書き）

s u n s h i n e エクスプロージョン

威力 45トン

怪人に決める必殺キックで相手のSDを破壊するときを使う。

第十三話 カマキリ人間（前書き）

蝙蝠怪人を倒してから2日が過ぎた朝のことだった。

二人の女子生徒が通学路の近くの土手でカマキリのような人間に襲われた。

そしてその重要参考人として服部雅彦が警備員に捕まってしまった。

真犯人を捕まえろ！！

第十三話 カマキリ人間

あの寮事件が解決してから2日がたった。

いつものように慣れた通学路を通り学校に着くと何故か中庭に屋台が立っていた。

屋台を見た俺は驚いた。なぜならその屋台の名前は次のとおりだった。「仮面ライダーグッズ屋台」

俺が驚いていると屋台から一人の男子生徒が出てきた。

それは皆がよく知っている軽音部ファンクラブ会長の服部雅彦様であつた。

俺「おい服部！この屋台はなんだ！！」

服部「見てわかんねえのか？仮面ライダーグッズ屋台で看板にも書いてあるだろ」

どうやらこの前の戦いをこの学校の数多くの生徒に見られてしまったらしい。

（無理もない。戦っていたのはこの学校の屋上だったんだからな）

服部「仮面ライダーグッズを売って金稼ぎすれば俺は億万長者間違いないだ！ファイヤ」

俺はコイツに呆れてしまった。

だが口で言うだけあってグッズはかなり売っていた。

服部「お前も一つどうだ？安くしとくぜ」

俺「うゝん遠慮しとくよ」

服部と俺が話しているとこの学校の警備員が服部も前にやってきた。

警備「服部雅彦、昨日の放課後どこで何をしていた？」

服部「昨日の放課後かゝ。それなら家で今売っている仮面ライダーグッズを作ってたぜ。なんか文句あるかゝ？」

警備「昨日、通学路の近くの土手でこの学校の女子生徒が二人カマキリのような顔をした人間に襲われたと言っている」

それを聞いた服部は頭に血をのぼらせ警備員に言った。

服部「なんだてめゝら。誰がカマキリだってゝなめてんのかゝ」

警備「とにかく警備室まで来てもらおう！」

服部「コラゝはなしかやがれゝ！俺は無実だゝ」

服部は警備員に腕を捕まされると連れて行かれてしまった。

そして俺が校舎に入ろうとするとまた誰かに呼び止められた。

それは梓と憂だった。

二人は腕や膝にすり傷を負っていた。

二人に傷のことを聞くとどうやらさっきの警備員が言ってた襲われ

た生徒と言うのはこの二人のことだったのだ。

俺「二人とも犯人の顔は見たのか？」

梓「それが：よくわかんないんです」

俺「じゃあ何故服部が犯人に疑われてるんだ？」

憂「それが顔がカマキリみたいな男性だったので：それに手にも鎌が付いていました。」

服部のイタズラにしてはやり過ぎている部分が多い。

それから俺はもう一つ気になっていることがあった。

それは憂は膝にすり傷を少しで済んでいるが梓の方はかなり酷い傷だった。

俺「梓痛くないか？」

梓「これくらいいたいしたことないです。それより帰りちょっと先輩に聞いておきたいことがあるんですが時間ありますか？」

俺「わかった。じゃあこの前の喫茶店で待ってるよ」

俺はこのとき梓の質問がどんなことか思いもしなかった。

第十三話 カマキリ人間（後書き）

服部が作った仮面ライダーグッズの主な商品

1 お面

2 文房具

3 ライダーマフラー

4 DVD（蝙蝠怪人との戦い）

まだまだいっぱい作っているらしい。

それにしてもDVDなんていつの間に撮ってたんだ？

第十四話 梓の震え（前書き）

梓はカマキリ人間に仮面ライダーを連れて来なければ命は無い！と言われたらしい。

土手に梓と一緒に迎う主人公。

はたしてカマキリ人間に勝てるのだろうか？

第十四話 梓の震え

放課後になったがまだ服部は帰って来なかった。
どうやら疑いは相当のものらしい。

俺は一年生のクラスまで梓を迎えに行くと二人で喫茶店に迎った。

梓は最初は黙っていたがやがて口を開き静かに俺に聞いてきた。

梓「先輩には怖い物がありますか？」

俺「いきなりだな。なんかあったの？」

梓「私は昨日から怖くて眠れません。」

俺「何を恐れてるんだい？」

梓「昨日のカマキリ人間が言ってたんです。次は必ず殺してやると……」

その話をしているときの梓の体はブルブルと震えていた。

俺「梓、今のことはもう他の誰かに話した？」

梓「いいえ。先輩が初めてです。」

俺「なんで俺に話してくれたの？」

梓「だって先輩……仮面ライダーなんでしょ？」

俺はその一言で驚いてしまった。

俺「違うよ！俺は仮面ライダーじゃないよ。だいたい誰がそんなこと言ったの？」

それを聞いた梓はその場で泣きだしてしまった。

どうやらカマキリ人間に言われたようだ。

仮面ライダーを土手まで連れてこれば命は助けてやると…。

この一言で俺はカマキリ人間がショッカーだということに確信が持てた。

俺「梓、土手に行こう。」

梓「でも仮面ライダーを連れて来ないと…。」

俺「梓の言うとおり仮面ライダーは俺だ。だけどこの事は二人の秘密だぞ。」

そう言ったとき梓の顔に笑顔が戻ってきた。

俺は一安心して梓と喫茶店を出ると土手に急いで迎った。

土手にはカマキリ人間はいなかったがショッカー戦闘員がバイクに乗って俺達に襲いかかってきた！

俺「梓！ここは俺に任せて早く逃げろ！」

梓が逃げる後を確認した俺はいつものように変身した。

ライダー「さあ、かかって来いよ！」

俺は次々と戦闘員をバイクから引きずり下ろし戦闘員を片付けた。

梓が戻って来た。

梓「先輩。カマキリ人間は出て来なかったですね。」

ライダー「そうだな。まあ今日のところは引き上げるか。」

そうして俺達が引き上げようとしたとき一台のバイクが猛スピードで俺達に突進してきた。

俺と梓は10メートルぐらい吹っ飛んだ。

俺は梓をかばったが梓は頭から血を流し倒れていた。

ライダー「おい！梓しっかりしろ！」

梓は目を開けない。

カマキリ「やっと来たな。仮面ライダー。さあ、俺様と勝負しようぜ！」

俺はいかりに満ちあふれていた。

ライダー「何故梓を狙った？お前の目的は俺だろ？」するとカマキリ怪人は言った。

カマキリ「俺は猫が嫌いなんだよ!!」

ライダー「梓は猫じゃない!人間だ!」

だがカマキリ怪人は俺の言うことを聞こうとはしなく自分の乗っているバイクをたくみに使い俺に突っ込んできた。

バイクに突っ込まれ降っとなだ俺は意識を失ってしまった。

カマキリ「仮面ライダーなんて俺様の敵では無い!!」

そう言う俺にとどめをささずに行ってしまった。

第十五話 超絶マシン始動（前書き）

カマキリ怪人に一回敗れた主人公は和が開発したマシン「マシンサ
ンライトニング」を操り再びカマキリ怪人に挑む。

戦え！ライダー！！そして梓の敵を討て。

第十五話 超絶マシン始動

意識を失い気がついた俺がいたのは病院のベッドの上だった。どうやら俺は完全にやつにぶちのめされたらしい。

「気がついた。良かった。心配したんだよー」

唯だった。俺は梓のことを思い出し唯に聞いてみた。

唯は俺を梓のいる所まで連れて行ってくれた。

梓は集中治療室で意識不明の状態だった。

俺は自分の力の無さに悔やんだ。

ちようどそこに和が見舞いに来た。

唯「和ちゃん、お見舞いに来てくれたの？ 悪いね。」

和「唯が言うことじゃないでしょ。全く。気分はどう？」

俺はそのとき気がついたことがあった。それは俺にもマシンがあればあのカマキリ怪人に勝てるかもしれないと……」

俺「なあ和、仮面ライダーにマシンを作ることは出来ないかな？」

和「それがもう服部君に頼まれて作ってあるのよ。ライダーって言うぐらいだからバイクを作ってやってくれて……」

俺「そういえば服部はどうなったの？」

俺が服部のことを聞くとどうやら服部は警備員から解放されたらしいが商店街の不良共に殴り込みに行くとか訳のわかんないことを言っ
て学校を飛び出してしまったらしい。

俺（とりあえず服部に会いに行ってみるか）と心の中で呟いた俺は和にバイクを病院に持って来てくれと頼むと走って病院を抜け出した。

商店街に行くと和の言っただ通り服部が不良共にやつ当たりをしていた。

服部「だいたいお前らみたいなクズがたまってるから商店街の人氣が下がる。違うか」

不良「あゝてめー喧嘩売ってんのか？」

服部「上等じゃねえか。かかってこいよ。」

これはヤバいと思った俺は服部のもとに走って行った。

服部「よくお前も喧嘩しに来たのか？これで2対2だ。負ける気がしねえな。」

俺「おい。勝手に俺を人数に入れるな！」

どうやら聞いていないらしい。二人の不良は何故か携帯を取り出し誰かに電話している。そしてしばらくすると仲間の不良らしきやつらが10人ぐらいたって来て俺達はあつという間に囲まれてしまった。

俺「おい！服部どうすんだよ？何か策はあるんだろうな？」

服部「ガハハハ、コイツは参ったな」

不良「もうじき俺達のボスが来てお前達はバイクで引きずられることになるぜ！」

昨日の女子生徒みたいにな。」

それを聞いた俺はそこにいる10人の不良をボコボコにしてその不良に言った。

俺「ボスに伝えろ！例の土手で待ってるってな」

俺は病院に戻った。病院に戻ると和が例のバイクを持ってきてくれた。

和「梓の方は私達に任せて。仮面ライダーによろしく！」

俺「ああ、そのように仮面ライダーに伝えとくよ」

俺はマシンを走らせ土手に迎った。

土手ではカマキリ怪人と戦闘員が待ち構えていた。

俺「変身！！」

光に包まれいつものように仮面ライダーに変わった俺はマシンを時速800キロで走行させカマキリ怪人と戦闘員を蹴散らした。

戦闘員は言うまでもなく全滅していた。

ライダー「残りは貴様だけだな。梓の敵は討たせてもらう。」

カマキリ「マシンの腕は俺様の方が上だ。勝負あったな。」

ライダー「勝負はやってみなきゃわかんないぜ！」

俺はやつの突進をかわすとやつのマシンにウイリーを決めた。

やつはマシンから叩き落とされ最後の武器である鎌で俺に切りかかってきた。

俺はソードSDで剣を呼び出すと剣で鎌に対抗した。

カマキリ「クソー攻撃が決まん！！」

ライダー「その短期な性格がどうやら欠点のようだな」

俺はカマキリ怪人の大振り攻撃をかわし剣でやつの両手の鎌を切り落とした。

ライダー「とどめだ！！」

俺は剣に「ライドアップ」SDを読み込ませると剣に全エネルギーを集中させた。

ライダー「メガsunshine！！」

俺はカマキリ怪人を一刀両断した。

ライダー「貴様の悪事もこれで：チェックメイト」

やつは爆発した。

俺はやつのSDを奪うとマシンに乗り病院に戻った。

その夜、梓は目を覚ました。医師の話だともう大丈夫だそうだ。集中治療室から個室に移った梓に俺はカマキリ怪人の話をした。

俺「やつのSDは破壊したしやつは警察に捕まったからもう大丈夫だ」

梓「じゃあ、先輩が勝ったんですね！」

俺「まあ、そういうことになるのかな」

梓「助けていただいてありがとうございました。」

俺「早く元気になれよ。憂や唯それに他のメンバーも心配してるから」

梓「服部さんはどうなったんですか？」

俺「警備員に説教しに行ったよ。あいつの説教好きには疲れるよ。」

俺達が話していると唯達が病室に入ってきた。

唯はいつものように梓に抱きついていた。

いつ見ても仲間というのはいいいものだ。

そんな俺の仲間を傷つけるショッカーを俺は一人一人倒して行くことを心に固く誓った。

第十五話 超絶マシン始動（後書き）

ライダーのマシン「マシンサンライトニング」のデータ

最高時速850キロ 最大出力600馬力

必殺技は時速850キロで相手にウイリーする「サンライトニングウイリー」だ！

第十六話 遊園地の巨大蜂の巣（前書き）

カマキリ怪人を倒し二週間がたった日曜日に俺は唯と遊園地に行くことになった。

最初は色々な乗り物に乗って楽しんでいた主人公と唯であったがその遊園地の観覧車に乗ろうとしたとき主人公が見た物は……

第十六話 遊園地の巨大蜂の巣

カマキリ怪人を倒してから二週間が過ぎた日曜日のことだった。

俺は商店街のくじ引きで当てた遊園地のペアチケットで今その遊園地に迎っていた。

ペアチケットと言うからには誰かを連れて行かなければならなくなり俺は唯を誘っていた。

（一人で遊園地に行っても楽しくないからだ）

遊園地まではバスで行くのだが乗って数分もしないうちに唯が酔ってしまったようだ。

俺「唯て乗り物弱いんだね。大丈夫か？」

唯「たぶん大丈夫：」

そのたぶんが心配であった。

そんな中バスは遊園地に着きバスで酔ったヨロヨロの唯をおぶって遊園地に入った。

俺「唯、最初何に乗る？」

唯「そうだな～じゃああれは？」

唯が指を指した方向にあったのはジェットコースターだった。

俺「いきなりあれか」

そう言った俺であったが唯が乗りたいと言ってることだし俺達はジェットコースター乗り場に行った。

乗り終わって地上に着いて決意したことが一つある……
(もうジェットコースターには乗らん!!)

俺はどうやら絶叫系の乗り物は駄目なようだ。

次にやったのはコーヒークップだった。

コイツは目が回り気持ち悪かった。

その次はお化け屋敷に入った。

ここのお化け屋敷は結構手がこつていたが俺も唯も普通に入り普通に出て来ていいいた。

昼食を食べ終わりまた乗り物に乗ろうと観覧車に迎った。

俺達は驚いた。

何故ならその遊園地のシンボルと言ってもいい大観覧車に巨大な蜂の巣が出来ていた。観覧車の係員に聞くとあの蜂の巣は昨日から出来ていて観覧車に乗った人々をあの蜂の巣から出た巨大蜂が捕まえているらしい。

どうやらあの蜂の巣に入って調査する必要があるようだ。

幸いなことに唯はトイレに行っていていない。

俺は観覧車に乗るとしばらく蜂の巣を睨みつけていた。

蜂の巣は丁度頂上に登り切る少し前のところに出来ていた。

俺が蜂の巣の入り口のような所を見つけたときだった。

いきなり巣から蜂怪人が俺を捕まえると巣の中に引っ張り込んだ！！

この巨大な蜂の巣はどうやらショッカーの仕業だったようだった。

だがショッカーは何故こんなところに巣を作り人を捕まえるのか、俺はその謎を解くためにしばらく巣の中で大人しくすることにした。

第十六話 遊園地の巨大蜂の巣（後書き）

今までの怪人たちの目的

クモ怪人

学園1のエースになるため他の運動部のエース達を次々と誘拐した。

コウモリ怪人

自分が住んでいる寮の生徒達をウイルスで操り自分の思い通りにしようとした。

カマキリ怪人

猫が嫌いと言う理由で主人公の後輩である中霧梓の命を狙った卑劣なやつだ。

第十七話 無愛想な店員（前書き）

蜂怪人の巣に入った俺は仮面ライダーに変身して蜂怪人と戦ったが
後一息のところまで逃がしてしまう……

第十七話 無愛想な店員

巢の中はかなり広くまるで秘密基地のようだった。

奥の方に連れてこられた俺が見たものは非常に残酷なものだった。

それは今までにこの巢に連れて来られた人が空腹で働けなくなっただけで今殺されるところだった。

蜂怪人「お前はもう用済みだ！ 戦闘員共コイツを始末しろ」

俺は老人を助けるため蜂怪人に勝負を挑むことにした。

俺「待て！ ショッカーその人を解放しろ！
それからお前達のここでの目的はなんだ？」

蜂怪人「ショッカーはこの大観覧車から地上に毒ガスを放出する。」

俺「お前もSDを使う前は人間のはずだ。そんな惨いことはやめろ
！」

蜂怪人「私は人間が嫌いなんだよ。だから今もこうやって観覧車に乗った人間を捕まえては毒ガスを作らせている。」

俺「じゃあその作戦は俺が阻止する。
変身！ ！」

俺はいつものように腹部に手をあてベルトを出現させると変身した。

蜂怪人「お前が噂の仮面ライダーだったのか！お会いできて光栄だわ。」

ライダー「捕まえた人達は俺がもらって行くから」

蜂怪人「ふざけるな！！」

蜂怪人は剣をむけてきた。

俺もやつに負けずとSDロードを剣に変えると蜂怪人と戦い始めた。

蜂怪人はかなりの剣使いでなかなか隙がない。

だがやつの羽を切ってしまえばもう観覧車から人を捕まえることは出来ないと思った俺は蜂怪人の背中に回ってやつの羽を思いっきり切断した。

蜂怪人「ギャアア」

ライダー「これでフィニッシュだな！」

俺は剣にライドアップSDをセットすると剣に全エネルギーを集中させた。

ライダー「メガsunshine！」

ところが蜂怪人は戦闘員を身代わりにすると外に逃げてしまった。

とりあえず俺は捕まっていた人々を逃がし観覧車を降りた。

下では唯がかなり不機嫌に待っていた。

俺「唯機嫌直してくれよ。」

唯「ブーブー」

唯はそっぽを向いてしまった。

俺「あそこにおいしそうなアイスクリーム屋があるぞ。行ってみないか？」

そう言った途端唯は満面の笑顔で俺を引っ張るとアイスクリーム屋に駆け出した。

アイスクリーム屋の店員はかなりの無愛想だった。

そして俺を見ると驚いた顔でこう言った。

店員「お前はさっきの！」

俺「えっ？どこかで会いましたか？」

俺はその店員からアイスを2つもらうとまた唯と遊園地の中を回り始めた。

それにしてもさっきの店員はいったい……。

第十八話 Dr. ジャイロ（前書き）

蜂怪人に捕まっていた人を救い出した遊園地を回っていた主人公と唯の目の前にさっきの無愛想店員がやってきた。

第十八話 Dr. ジャイロ

あれから色々な乗り物に乗ったがやはりさっきの店員のことは思い出せなかった。

唯「ねえねえ、次は何に乗る？」

俺「うーん何に乗ろうな」

悩むのも無理はない。もうあれからこの遊園地のほとんどの乗り物に乗ってしまったからだ。

俺達がブラブラしながら歩いているとさっきの無愛想店員が俺の前にやってきた。

俺「あなたはさっきの店員さん：店の方はいいんですか？」

店員「店よりもお前の始末の方が先だ！」

店員は腰にバックルをするとSDを取り出し変身した。

俺「唯、ここは俺に任せて早く逃げろ！！」

唯「で、でも……」

唯は怯えていて足が動かないようだ。

俺「いいから早く！」

俺は唯の手を引っ張ると遊具の影に隠れさせた。

他の人達も蜂怪人を見るなりみんな遊園地の中を逃げ回っていた。

蜂怪人「さあ、お前の命を頂くぞ！」

俺「残念だがそう簡単にあげれる物じゃないんでね。」

俺はベルトにSDを差し込み変身した。

蜂怪人の羽はどういう訳か再生していた。

ライダー「その羽はさっき俺が切断したはず！！」

蜂怪人「オホホホ、私の羽はDr. ジャイロによって再生させてもらったのよ！」

ライダー「Dr. ジャイロ？何者だ？」

蜂怪人「Dr. ジャイロはショットカーの大幹部になるお方で私にこの力をくれた人偉大な人よ」

ライダー「じゃあまさかそいつが町の人達にSDを配っていたのか！！そのいかれヤローの所まで案内してもらおうか？」

蜂怪人「それは無理ね。何故ならお前はここで私に殺されるんだから！！」

蜂怪人はバックルに手をあてるとバックルが光出し戦闘員が数人出てきた。

蜂怪人「さあ、戦闘員共遊園地の中の人間共を捕まえて来い！！」

戦闘員「イイー！」

戦闘員達は走って行ってしまった。

ライダー「貴様はもう許さんぞ！今度こそ決着を着けてやる！」

俺と蜂怪人の戦いが始まった。

蜂怪人は相変わらず剣での攻撃を得意とし俺はやつの一太刀を払いのけるのがやっとだった。

だが負ける訳にはいかない！

俺は蜂怪人から少し間を空けるとベルトにエネルギーを集中させた。

ライダー「sunshineフラッシュ」

蜂怪人はモロに俺の光を浴びた。

蜂怪人「ギャアア目が目がー」

蜂怪人はもがきながら遊園地の中を走り出した。

このままではマズい。

ライダー「サンライトニング！！」

俺はマシンに乗ると蜂怪人を追いかけた。

第十八話 Dr. ジャイロ（後書き）

s u n s h i n eフラッシュ

ライダーベルトにエネルギーを集中させて放つ光線。

エネルギーを集中させればさせるほど威力が増し怪人の動きを鈍らせることも可能である。

第十九話 約束（前書き）

s u n s h i n eフラッシュをくらった蜂怪人はもがきながら空に
飛び立ってしまった。

決める！！ s u n s h i n eエクスプロージョン！！！！

第十九話 約束

俺が蜂怪人を追いかけて行くとやつはもがきながら空に飛び立ってしまった。

このままでは逃げられてしまう！！

俺はマシンを最大出力にして蜂怪人目掛けてぶっ飛ばした。

俺はそこからマシンを踏みだいにすると蜂怪人めがけてsunshine エクスプロージョンを放った。

俺の必殺技をくらった蜂怪人は空中で大爆発した。

蜂怪人がいなくなると戦闘員達も煙のように消えてしまった。

蜂怪人に変身した店員は警察に捕まり遊園地は救われた。

でも俺は蜂怪人の言っていたDr. ジャイロのことがどうしても頭から離れなかった。

前に一回どこかで会ったような気がしてならない。

帰りはこの騒ぎのためにバスがかなり遅れるらしく俺は唯をバイクに乗せると夜のハイウェイは走っていた。

唯「今日は楽しかったね。みんなのお土産も買えたし……さつきから何考えてるの？」

俺「別に何も考えてないよ。それよりごめんな」

唯「何が？」

俺「今日、観覧車するとき一人にさせちゃっただろ。」

唯「あゝ大丈夫だよ。気にしてないから。元気だしなよ！」

俺「約束するよ」

唯「えっ？」

俺「もう……一人にはしないって」

唯「うん。約束だよ」

この約束をしたあと俺はどんな敵が来ても負ける気がしなかった。
いや負けられないんだ！

唯との約束を守るためにも：絶対に。

そのころショッカーの地下基地では……

？「キングが動きだしたぞ！！！」

D r. ジャイロ「わかっております。ですがやつは記憶を失っております。もう少し泳がせてみてはどうかと……」

？「ふん！好きにせい！！！！」

D r. ジャイロ「キングはともかくクイーンまでどこに行ってしまったんだ……」

D r. ジャイロが話していた相手はいつたい何者なのか？
そしてキングとは誰のことなのか……

第十九話 約束（後書き）

D r. ジャイロ

モンスターSDを作り出した超本人。

悪魔の頭脳を持つ科学者と裏世界で呼ばれているらしい。

知能指数 およそ400

第二十話 謎の金髪少女（前書き）

遊園地事件を解決して街に仮面ライダーの名が響き渡るようになったある日のことだった。

俺は軽音部の秋原濤にこの街に新しく出来た美術館に行こうと誘われた。

誘いを受けたその日の学校帰りにコンビニに寄る主人公だったが：

第二十話 謎の金髪少女

遊園地の事件から1ヶ月が過ぎた。あの事件以来仮面ライダーの噂は学園だけでなく街のいたるところまで広がってしまった。

そんなある日のことだった。

俺がいつも通り学校に行き自分の席で朝の用意をしているとクラスの外から俺を呼ぶ生徒がいた。

軽音部の部員の一人の漣だった。

俺「なんか用か？」

漣「実は頼みがあるんだ：今度の日曜日新しく出来た美術館に一緒に行ってほしいんだ：」

俺「別にいいけど入場はタダなの？」

漣「高校生は入場料500円なんだけど無料券二枚もらったんだ。」

俺「でも珍しいね。漣が律じゃなくて俺を誘うなんて：わかったぞ！律と喧嘩でもしたな。」

漣「違う！律はその日予定が入ってて無理らしいんだ：唯もムギも梓もみんな：：：」

俺「服部がいるじゃないか。あいつも無理なのか？」

漣「あいつとは絶対いや！！！」

俺（だろうな。やれやれ）

俺「わかったよ。特にその日用事はないし俺で良ければ一緒に行くか？」

漣「本当に！！じゃあ日曜日の朝10時に例の美術館の前で集合な。……遅れたりしたらやだからな……」

漣は照れくさそうに言う俺の教室から出て行った。

しかしその直後また面倒なやつが俺の前にやってきた……そう漣の嫌がってた服部 だ！

服部「お前漣ちゃんと何話してたんだ」

俺「あゝ別に大した話じゃないよ」

（本当のことをコイツに話すと面倒なことになりかねん！）

服部「お前この俺に隠し事する気か」

俺「何も隠してないぜ！」

服部「はけ」

俺「あっ服部。外に仮面ライダーが！！」

服部「何！どこだ？あゝしまった……逃げやがったな」

俺は教室を出てしばらくの間、化学部の部室に身を隠した。

そこではいつものように和が朝から熱心に何かの実験をしていた。

和「澤から聞いたよ。今度の日曜日、一緒に美術館に行くんでしょ。頑張ってるね。」

俺「美術館に行くだけなのに何を頑張るんだ？」

和「あら、あなたも意外と鈍感なのね。」

俺「はあ、なんのこっちゃ？」

全く意味がわからなかった。

（はあ、今日はまだ朝だったのにかなり疲れちゃった。）

そね日の学校帰りの事だった。俺が暇つぶしのためにコンビニに入ろうとするとそのコンビニの駐車場に一人の少女が立っていた。

その子の髪は足の爪先までとどきそうなくらいの金髪で冷たい目で俺の方を見ていた。俺に用でもあるのだろうか？

俺はその少女に近寄り話かけてみた。

俺「どうしたの？俺に用でもあったかな？」

少女「……どうしてあなたがここにいますか？」

俺はその少女の一言に一瞬手間取った。

まるで俺とどこかであったような口振りだったからだ。

俺「もしかして、前にどこかで会ったかな？」

少女「……また会いましょう。」

そう言い残すと少女は街の方に歩いて行ってしまった。

俺は彼女とどこかで会ったような気がしてならなかった。

それも俺にとってかなり重要な人物だったような……だが思い出せない。

その日、俺は山中先生に電話をして俺が倒れていたとき近くに金髪の少女がいなかった聞いてみたが駄目だった。

いったいあの少女は何者なのだろうか？

第二十一話 もう一つのライダーバツクル（前書き）

美術館に迎う主人公。

だがその途中でトカゲ怪人に襲われるがなんとかその攻撃をかわす主人公であった。

第二十一話 もう一つのライダーバツクル

結局あの後もコンビニで会った金髪の少女のことは思い出せなかった。

今日は滞り約束していた例の日曜日だ。

俺は待ち合わせの場所に急いでいるといきなり俺の方に何かが飛んできた！

間一髪それをかわした俺はその飛んできた物体を確認した。

それはなんと鋼鉄で出来たサッカーボールだったのだ！

飛んで来た方向を見るともう見慣れたような連中がそこに立っていた。

それはショッカーの怪人と戦闘員だった。

そしてこのサッカーボールはその怪人が蹴った物だった。

10時まで後20分しかない。

こんなところで足止めをくう訳にはいかない！

俺はいつものように変身するとやつらの方にマシンごと突っ込んだ。

戦闘員は相変わらず弱い。マシンから出した衝撃波をくらってみんなダウンしていた。

しかし問題なのはこの怪人だ！

見た目からしてどうやら「トカゲ怪人」のようだ。

トカゲ怪人は両腕で俺のマシンを止めるとマシンごと俺を放り投げた。

どうやらコイツは腕と足の筋肉が想像以上に強いらしい。

俺はマシンから降りるとトカゲ怪人に跳び蹴りを放った。

しかし、その跳び蹴りもトカゲ怪人に弾かれてしまった。

トカゲ怪人「仮面ライダー！俺の鋼鉄シュートを受けてしろ！！」

そう言うのとトカゲ怪人は鋼鉄のサッカーボールを俺目掛けて蹴り飛ばしてきた。

鋼鉄シュートは見事に俺の体に当たった。
当たった感想を言おう。（痛い！流石は鋼鉄で出来たサッカーボールだ）

今のままじゃコイツには勝てない！

ライダー「トカゲ怪人！勝負は預けるぞ！！」

俺はマシンに飛び乗るとその場から走り去った。

幸いトカゲ怪人は追ってこなくなるとか10時5分前に美術館に着くことができた。

だが濡はもう来ていた。

俺「もしかして結構待ったか？」

漚「別にそこまで待ってないよ。」

俺「そっか。じゃあ中に入ろうか。」

俺と漚は美術館に入った。

美術館の中はかなり広かった。

日曜だけあって人も結構いた。

俺「結構人もいるんだな」

漚「そうだな。日曜日だしオープンしてまだ2日目だからじゃないか」

俺「そういえば漚はこの美術館で一番見たかった物とかあるの？」

漚「一応あるよ。それはたぶん二階の一番奥の部屋かな。」

俺達は一階の展示品をしばらく眺めると二階の奥に迎った。

二階の奥の部屋はかなりの人がいた。

漚の見たがっていた展示品はこの美術館のシンボルらしい。だが、その展示品を見た俺は驚きが隠せなかった。

何故ならそこに飾られている展示品は今俺の腹の中に入っている「ライダーバツクル」だったからだ。

漚「この展示品の名前は：月の光：だって。どいして月なんだろう（不思議だな」

俺「月の光：：」

漚「どうかしたか？あまり好みの品じゃなかった？」

俺「いや、そんなことないよ。見た目も結構きれいだしな」

どういう事だ！

なぜ俺の持つてるベルトがこんな所にあるんだ？

俺が悩んでいると漚が言った。

漚「どこか具合でも悪いのか？」

俺「えっ大丈夫だよ。アハハ、ほらジュースでも買ってくるよ。待ってろよ」

そう言って俺は美術館の中にある自販機に行った。

俺がジュースを買い漚のところに行こうとしたとき後ろから小さな声に呼び止められた。

俺を呼び止めたのはあの子の金髪少女だった。

少女「：あれを見たか？」

俺「あれ？二階にある月の光っていう展示品のことか？」

少女「：そう。見て何か思い出したか？」

俺「いや、特に何も：そんなことより教えてくれ！君は俺の過去を知ってるのか？」

少女「：：あなたと私はいずれ戦うことになる。生き残れるのはキ

ングのあなたかクイーンの私のどちらかだ：」

そう言う少女はその場から消えてしまった。

俺「待ってくれ！どういう意味だ！！」

わからないことが多過ぎる。

俺がキングである金髪少女がクイーンとはどういうことなのだろうか。

とりあえず俺は濡のいる場所に戻ることにした。

そこで何が起きてるかも知らずに……

第二十一話 もう一つのライダーバツクル（後書き）

ライダーバツクルの謎

美術館に展示されていたバツクルの名は「月の光」

主人公の体の中にあるバツクルの名は

「太陽の光」だ！

この2つのバツクルはいったいなんのためにあるのだろうか？

第二十二話 もう一人の仮面ライダー（前書き）

滞のところに戻るとそこではバックルが盗まれており犯人はどうやらトカゲ怪人のようだった。

トカゲ怪人を追え！！

第二十二話 もう一人の仮面ライダー

ジュースを両手で持ち濡のところに戻るとそこはさっきよりもなんだか騒がしく館内の警備員が何人も集まっていた。

俺は濡を見つけるとその訳を聞いてみた。

すると濡はバックルの飾ってある場所を震えながら指差した。

なんとそこにはバックルはなく代わりに鋼鉄のサッカーボールが置いてあった。

鋼鉄のサッカーボールには紙が貼られてありその紙にはこう書いてあった。

（仮面ライダーに伝えろ！バックルは預かった。返して欲しければ美術館裏の緑地公園に来い！）

とんでもないことになった。

周りの人は慌てているし濡は濡で震えているし。

とにかく俺は美術館裏の緑地公園に行ってみた。

緑地公園は結構広くトカゲ怪人の姿は無かったが美術館の警備員らしき人が一人ベンチに腰掛けていた。

警備員は俺に気が付くとバックからバックルを出して俺に話しかけてきた。

警備員「来てくれたようだね。もう俺の正体はわかるだろ？」

俺「ああ、トカゲ怪人！バックルを返せ！」

警備員「俺を倒せたらな！」

そう言うのと警備員はベルトを巻きSDを差し込んだ。

警備員はトカゲ怪人に変身した。

俺「口で言ってもわかんねえようだな」

俺もバックルにSDをセットし変身した。

トカゲ怪人は相変わらずの腕力で俺に凄まじいパンチを放ってきた。

（コイツとは素手で勝負するのは不利だ！）

そう思った俺はSDロードにソードSDを差し込んで剣で戦うことにした。

だがトカゲ怪人の体はかなり堅く頑丈だった。

ライダー「クソ！剣も駄目なのか」

トカゲ怪人「ライダーこれで終わりだ！鋼鉄シュート！！」

トカゲ怪人はお得意の鋼鉄シュートをまた俺をゴールに放ってきた。

ライダー「こうなったらボールごと切ってやる！」

俺は剣にライドアップSDをセットした。

ライダー「メガsunshine!」

俺は鋼鉄ボールを切り裂きそのままトカゲ怪人を切ろうとしたときだった。

いきなり眩しい光が目の前に現れた。

そしてそこにいたのは美術館でいきなり消えた金髪の少女だった。

ライダー「何故君がここに？」

少女「：やつと戦うときがきた：」

そう言う和金髪少女は目を押さえているトカゲ怪人からバックルを奪うとそれを自分の腹部にあてた。

バックルは俺のとき同様、少女の腹の中に吸い込まれてしまった。

少女はポケットからSDを出すとそれをバックルにセットした。少女「：：：変身」

少女の体は光に包まれ変身した。

俺「君も仮面ライダーだったのか？」

少女「：：私はクイーン。あなたを倒す前にまずは：」

そう言う少女が変身した仮面ライダーはトカゲ怪人の腹に思いつき蹴りをいれた。

トカゲ怪人は数メートル吹っ飛ぶと怒り狂って怒鳴った。

トカゲ怪人「貴様も仮面ライダーかー!!」

少女は小さな声で呟くように言った。

少女「：仮面ライダー：：ムーンライト」

そう言った途端に少女はトカゲ怪人に接近するとやつのバックルにパンチを入れた。

トカゲ怪人は苦しみもがいていた。

ムーン「とどめ：」

そう言うともーンライトはSDロードにライドアップSDを差し込んだ。

ムーン「：ムーンライトスマッシュ」

ムーンライトの両足キックが見事に決まった。トカゲ怪人は爆発するとともに警備員に戻った。

ライダー「いきなりで驚いたけど：とにかくやったな」

俺はムーンライトに近づいた次の瞬間ムーンライトは俺目掛けて跳び蹴りを放ってきた!

ライダー「なんのつもりだ!」

ムーン「：言っただけ：あなたは私と戦わなければならない：」

ムーンライトは戦闘体制に入っていた。

何故こんなことになるんだ！同じ仮面ライダーなのに。

第二十二話 もう一人の仮面ライダー（後書き）

仮面ライダームーンライト

パンチ力 10トン

キック力 15トン

ジャンプ力 ひとつ飛び60メートル

足の速さ 100メートルを4、2秒で走る

必殺技

ムーンライトスマッシュ

ギガムーンライト
など

第二十三話 ライダーVSライダー（前書き）

もう一人の仮面ライダー「ムーンライト」はショッカーの仲間でありショッカーよりも残酷な計画を身に秘めていた。

果たして主人公「仮面ライダー sunshine」はやつの計画を阻止してやつの目を覚ますことが出来るのだろうか。

第二十三話 ライダーVSライダー

仮面ライダームーンライトは容赦なく俺に切りかかってきた。どうやら俺の命をもらおうというのは本気のようなのだ。

ライダー「俺の命を奪った後は何を望むんだ？」

ムーン「：私は世界のいたるところにショッカーの網をはる」

ライダー「本気で言ってるのか？君はまさかショッカーの手先なのか？」

ムーン「：以前はあなたもそうだった：」

ライダー「やはり君は俺の過去を知ってるんだな」

ムーン「：お喋りはここまで：これからは戦いあるのみ：」

ライダー「君がショッカーのために戦うのなら：俺も本気で君の計画を阻止してやる！」

こうして俺と金髪の少女の戦いが始まった。

同じ仮面ライダーなのか戦い方が俺とよく似ていた。

剣で戦えばやつも剣を使ってくるし素手で戦えばやつも素手でくる！はつきり言って全然隙がない！！

俺はライドアップSDをSDロードにセットした。

それを見たムーンライトもライドアップSDを取り出した。

ライダー「次で決着をつける！」

ムーン「……私が勝つ。」

二人はいっせいに空に飛んだ。

ライダー「sunshineエクスプロージョン!!」

ムーン「ムーンライトスマッシュ!!」

二人のキックがぶつかり合い空中で大爆発が起こった。

その爆発で俺は緑地公園の池の中に吹っ飛んだ!

池から上がるとそこにはもうやつの姿はなかった。

だがやつがまだ生きていることは俺にもなんとなくわかった。

俺はひとまず警備員を警察に任せると緑地公園を後にし美術館に戻った。

美術館の二階では濡がまだ震えていた。

俺は濡を連れて美術館を出た。

俺「どっかでコーヒーでも飲んで帰るか？」

濡は首を縦に振った。

美術館から10分のところにある喫茶店に入った俺達はそこでまた変なやつの変な行動を見ることになった。

何故ならそこには服部がいた。しかもやつはその喫茶店の女店員にナンパしていた。

服部「なあ今から俺とデートしねーか？」

女店員「止めてください！」

服部「おうおう、なかなか威勢もいいじゃねえか！ますます気に入ったぜ」

その光景を見ていた澪はますます震えていた。
震えを落ちつかせるために喫茶店に入ったのに……はあく勘弁してくれよ。

第二十三話 ライダーVSライダー（後書き）

あの子の服部は喫茶店の女店員が呼んだ警察によって保護された。

滯はというその後も震えていてその日から3日間学校を休み家で寝込んでしまった。

第二十四話 恐怖のパーティー会場（前書き）

紬の父親の親友の誕生日パーティーに招待された主人公。
ところがその親友と言うのはなんとD r. ジャイロだった。

D r. ジャイロに会うためにパーティー会場に乗り込む主人公であった。

第二十四話 恐怖のパーティー会場

美術館の事件から3日が過ぎ、滯が学校に顔を出して来た。どうやらもう大丈夫のようだった。

この日の放課後のことだった。

俺が軽音部の部室でほぼ毎日のように紬が持ってくるケーキと紅茶を飲んでいたときのことだった。

紬は俺に一通の手紙を差し出した。

俺「この手紙はなんだい？」

紬「実は今度の土曜日に私の家でパーティーがあるの。もう唯ちゃん達には渡したんだけどもし良かったら来てね。」

俺「そういえば紬の家はかなりの金持ちだったね。でもなんのパーティーなの？」

紬「私の父の親友の誕生日なの。確か親友の人の名前は「ジャイロ・デバイソ」別名「Dr. ジャイロ」とも呼ばれてるらしいわ。」

その名前を聞いた途端、俺は紅茶を持った手を止めた。

俺「Dr. ジャイロだと!!」

紬「ええ、なんでもかなりの研究熱心な科学者で今はSDカードの研究に情熱を燃やしてるとか：」

間違いないモンスターSDのことだ！」

やつめ！まさかパーティー会場でSDをばらまく気か？
まあどっちにしてもパーティーには参加しなければ……

そう考えているといきなり部室の戸が開き唯達が入ってきた。

唯「ねえ、聞いた？ムギちゃんの家でパーティーだって。おいしいものたくさん出るのかな。楽しみだね。」

服部「やっとムギちゃんの父上にあえるのか。こりゃ1978年もののコーラを持ってかねーとな」

みんなそれぞれ盛り上がっていた。

だが俺はそうは浮かれていられなかった。

俺の表情を読み取ったのか梓が俺に話しかけてきた。

梓「先輩どうしたんですか？」

俺「お前には言っておくがパーティー会場にもしかしたら怪人が現れるかもしれない」

梓「えっ、どういうことですか！！」

俺は梓にDr. ジャイロのことなどを小声で話した。

梓「私に出来ることはありますか？」

俺「もし怪人が出たとき梓にはみんなを非難させてほしいんだ。」

梓「わかりました。お安いご用です。」

このパーティーには軽音部の顧問の山中校長も招待されているらしい。

パーティーが無事に住めばいいが……

こうしてその日の放課後が終わった。

あれからあつという間にパーティーの日がやってきた。

俺は唯といっしょに紬の家に迎った。

さすがに紬の家はでかかった！まさに大富豪が住む家にふさわしく思った。

門で招待状を見せると案内人が会場まで案内してくれた。

会場に入るともうすでにみんないて周りのごちそうなどを食べたりしていた。

服部「こりゃうめえな。」

服部は髪にワックスを付けてタキシードでバッチリ決めていた。

本気で紬の父親に挨拶するつもりなのか？

律「おーい。お前も早く食べろよ。なくなっちゃうぜ！」

律もすごいハイテンションだった。

あれこれ30分が過ぎたころだった。

会場の照明が消え舞台のところだけが照らされていた。

一人の男の人が舞台上がり演説を始めた。
今演説をしている人がどうやら紬の父親らしい。

父親「今日は私の親友の誕生日パーティーに来てくださって誠にありがとうございます。では私の親友を紹介します。D r. ジャイロの登場です」

その後盛大な拍手とともに白衣を着た60代ぐらいの男が舞台上に上がった。

どうやらやつがD r. ジャイロのようだ。

D r. ジャイロは軽くみんなにお礼を言うと舞台裏に消えていった。
(逃がすか!)

俺は素早く舞台裏に行くとなつは舞台裏の椅子に腰掛けていた。そしてやつは俺に気が付くと俺に話しかけてきた。

D r. 「元気そうですね。キング。」

俺「俺はショッカーのキングになるつもりはない!! 今すぐ街の人にS Dを配るのはやめろ!!」

D r. 「それはできません。あれはこの街のシンボルのような物ですから」

俺「人を悪魔にする道具がか? ふざけるな!!」

D r. 「いずれあなたもその悪魔になる。そもそもあなたが記憶を失ったのは私の実験が失敗したからなのだよ」

俺「何! どういうことだ!」

D r. 「まあ今日はパーティーを楽しんでくれたまえ。地獄のパーティーをな」

俺「地獄だと！なんのことだ？」

D r. 「すでに種はまいてある。せいぜい楽しんでくれ王子様：フハハハハ」

やつは高笑いすると暗闇に消えていってしまった。

俺はみんなのところに急いでもどったがどうやら一足遅かったようだ。

紬がさらわれてしまっていた……。

第二十五話 蘇る怪人達（前書き）

パーティー会場の外ではムーンライトが待ち構えていた。やつと戦っている時間はない！
どうする仮面ライダー！！

第二十五話 蘇る怪人達

紬をさらったやつらを追ってパーティー会場の外に出た俺にまたまたいきなり切りかかってくるやつがいた！

金髪の少女だった。

俺「また君か！今は君の相手をしてる時間はないどいてくれ！」

少女「：それは出来ない。あなたが私の前にひざまずくのなら別だが：」

俺「何回も言わせるな！俺はショッカーにひざまずくつもりはない！！：：：変身」

少女「：：：なら力ずくで：：：変身」

俺と彼女はそれぞれ光につつまれ変身した。

だが俺は彼女と真正面から戦う気はこのときはなかった。

sun shineフラッシュで目をくらませるつもりだったがやはりそう上手く事は進まなかった。

ライダー「くらえ！sun shineフラッシュー！」

ムーン「：ムーンライトフラッシュー！」

二人の光がぶつかり合い俺はムーンライトの光に吸い込まれてしまった。

光に吸い込まれた俺が来たのはどうやら何かの墓場のような場所だ

った。

ムーンライトの声が聞こえる。

ムーン「：：そこは今まであなたが倒してきた怪人の墓場：
あなたは彼らを全てたおせるのかしら？：」

ムーンライトがそう言ったあといきなり墓場が光だし今まで倒した
はずの怪人達が襲いかかって来た。

ライダー「負ける訳にはいかん！」

さすがに人数では負けるがこっちはやつらを一回倒している。
つまりやつらの弱点などを付けば負けるはずが無い！

俺はまずクモ怪人の糸をかわしやつらのベルトに蹴りを入れ次にコウ
モリ怪人のきらいな光を出すためにsunshineフラッシュを
お見舞いした。

2体の怪人は消えてしまった。

カマキリ怪人が鎌を光らせ飛びかかってきた！

俺はSDロードを剣に変えるとメガsunshineを放った。
カマキリ怪人は消えて次に蜂怪人が剣を振るってやってきた。

俺「お前の弱点は確か羽だったな！」

そう言うが早いか俺はやつの後ろに周り込み羽を切り刻んだ。
蜂怪人も消滅した。

最後はトカゲ怪人の鋼鉄シュートが襲いかかってきたがボールの軌道がワンパターンなためもう簡単によけられる。

俺はトカゲ怪人にとどめの一撃を放った。

ライダー「sunshineエクスプロージョン！」

トカゲ怪人は大爆発した。

全ての怪人を倒すと俺はムーンライトが作り出した世界からもとのパーティー会場の外にいた。

ムーンライトはもういなかった。

ムーンライトの作り出した世界からは抜け出せたが肝心の紬はもうこの辺にはいなかった。

俺は一旦パーティー会場に戻った。

会場にいたみんなに俺は紬がさらわれたときの状況を聞いた。

みんなが言うには犯人の姿は見えてないらしい。

気が付くと紬が気を失い誰かに持ち上げられた体勢で外に連れていかれたとか：

（くそ！見えない敵をどうやって倒せばいいんだ？）

服部が口を開き言った。

服部「うーんこれはひょっとするとカメレオンの仕業かもな」

俺「カメレオン怪人か？」

服部「ああ、カメレオンなら姿が見えなくてもおかしくねえだろう。

カメレオンじゃなかったらお化けぐらいか！ガハハハ」

服部は隣にいた濡に思いつきりぶん殴られると延びていた。

服部「クウウさすが濡ちゅわんいい張り手だぜ」

駄目だこりゃ……

そんなときパーティー会場に不気味な声が響きわたった。

「琴野社長につぐ： お前の娘は預かっている返してほしければ例の物を持って港に来い！」

俺は紬の父親に詳しい話を聞いた。

あの不気味な声の正体は紬の父親が言うにはこの前の取引がキャンセルになった製品会社の社長だそうだ。

俺「それで例の物というのは？」

父親「これです」

父親は俺に一枚のSDカードを見せてくれた。

よく見るとそれはモンスターSDではなくどっちかというと俺の使っているSDに似ていた。

とうとうやつの言ってきた時間が来てしまった。紬の父親はSDを持つと車に乗り込み港に迎った。

そして俺も後をつけることにした。

第二十五話 蘇る怪人達（後書き）

ムーンライトフラッシュについて

ムーンライトフラッシュは相手の目をくらませる sunshine
フラッシュと違って光を浴びた相手を自分の作り出した世界に吸い
込む力を持っている。

第二十六話 新たなSDカード（前書き）

港に着いた俺達を待っていた犯人は姿は見えないが声がするやつだった。

果たして仮面ライダーは犯人の正体を見抜き捕らわれた紬を助けることが出来るのだろうか！！

第二十六話 新たなSDカード

港に到着した。

父親は車から降りると大声で叫んだ。

父親「おい例の物を持ってきたぞ！娘を返してくれ！」

紬の父親がそう叫んだ後どこからともなく返事が聞こえてきた。

「よし。まず物を見せてもらおうか！」

父親はその声に従い物を見せた。

するとその物が勝手に宙に舞い上がった。

「ご苦労だったな。」

父親「さあ娘を返してくれ！」

「娘はクレーンの上だ！」

俺はやつが言ったクレーンに目をやるとクレーンの先に紬が縛り付けられぶら下げられていた。

紬「お父様！」

父親「紬！！」

「ハッハハハ、面白い親子愛だな。さあ、最後の仕上げだ。こうしてくれ！」

やつがそう言った途端に紬のロープが切れた。
紬は真っ逆様に落ちていく。

ライダー「くっ間に合え！」

俺は間一髪で紬を助けることに成功した。

「おのれ、邪魔な仮面ライダーめ」

ライダー「姿を現せ！この化け物！！」

そう言うときやつは港に止まっていた船の上から現れた。
声の正体はカメレオン怪人だった！

ライダー「カメレオン怪人！何故この親子を狙った？」

カメレオン「この琴野は俺との会社の取引を断りやがった！それが
頭に來たからだよ！」

ライダー「そんな理由で貴様はこの親子をこんな目に合わせたと言
うのか！許さん！！」

カメレオン「ライダー！君に私は倒せない。何故なら君は私の姿が
見えないからだ！ハッハハ」

そう言うときやつは姿を消した。

ライダー「姿が見えないならあぶり出してやる！」

俺はいつものようにベルトにエネルギーを集中させた。

ライダー「sunshineフラッシュ!!」

俺は港中を光で照らした。するとカメレオン怪人は姿を現した。

カメレオン「ぐおお!なんて眩しいんだ。だが俺の武器は姿を消すことだけじゃねえ!」

やつは舌を伸ばすと俺を縛り上げて来た。

ライダー「くっ」

カメレオン「さあ、お前の最後だ!仮面ライダー!!」

(あの親子のためにも負けられねえんだ!)

俺はまたベルトにエネルギーを集中させ至近距離からsunshineフラッシュを放った。

カメレオン「ぐおお目が見えん。」

ライダー「よし。今だ!」

俺はライドアップSDをセットした。

ライダー「sunshineエクスプロージョン!!」

俺の必殺キックがカメレオン怪人の顔面に直撃した。怪人は爆発するもとの社長に戻った。俺はカメレオン怪人のSDを奪い帰ろうとしたときだ。

後ろから紬が走ってきた。

紬「私を助けてくれてありがとうございます。やっぱりあなたはこの街のヒーローですね。」

そう言うとき紬の父親も俺のところに來て俺にカメレオン怪人が欲しがってた物を渡してくれた。

ライダー「紬のお父さんこれはいったい？」

父親「君に持ってたほしんだ。この街を守る君に。」

俺はそのSDを受け取るとマシンを走らせ港を後にした。

パーティー会場に戻ると澪が服部に追っかけられていた。

澪「来るな！このカマキリ野郎！！」

服部「澪ちゅわん愛してるよ」

俺「服部のやつどうしたの？」

律「ジュースと間違えて酒飲んじやったんだ！」

唯「おかげでいつも白い肌が真っ赤だね。」

梓「唯先輩！見てる場合じゃないですよ！服部先輩を止めないと。」

俺「おっと、そうだな。これはさすがにヤバイ」

こうしてこのパーティーはなんとか幕を閉じることが出来た。
だが紬の父親からもらったSDはいつたいなんの力が宿ってるのか
このときの俺はまだ知らなかった。

第二十六話 新たなSDカード（後書き）

謎のSDカード

紬の父親からもらったSDカードには今までのSDと違い名前も何も書かれていなかった。

いったいどんな力が宿っているのだろう。

第二十七話 恐怖の逮捕状（前書き）

パーティー事件が終わり一息ついた主人公だったが、ある日学校の警備部という部活の連中に服部と唯が逮捕されてしまう。

唯をかばおうとして必死に抗議する主人公だったが……

第二十七話 恐怖の逮捕状

パーティー会場で起こった事件は無事に幕を閉じてからまたいつも通りに学校に通っている俺ではあったがD r・ジャイロの言っていた一言が気になっていた。

何故やつの実験の失敗で俺が記憶を失わなきゃいけなかったのか。それともう一つは紬の父親からもらった例のSDのことだった。

化学部の和に調べてもらったが結果は出なかったし試しにベルトに差してみたが何も起こらなかった。

校門には珍しく山中校長が立っていた。

山中「この前のパーティーは結局また仮面ライダーのお手柄みたいだったわね」

俺「そうみたいです。紬も無事に帰ってきたことだし：」

山中校長と軽く話したあと俺は教室に迎った。
そこには服部以外のいつものメンバーが揃っていた。

俺「あれ？服部はどこだ？」

唯「服部君なら2階の服部室だよ」

俺「服部室ー！？なんだよその部屋？」

服部室とはどうやら服部専用の部屋で部屋の中には1900年代の

コーラやとにかく色々置いあるらしい。

俺「その部屋のこと誰か文句とか言ってこないの？」

律「前までは無かったけど最近警備部のやつらがたまに文句言いに
いってるぞ」

俺「警備部！？なんだそりゃ？」

警備部とは風紀員の上にあたる部で学校の風紀を乱すやつを捕まえて取り締まるらしい。

俺「へえ、変な部活」

滯「まあ、この学校の部活はちょっと変わった物が多いからな」

俺達が話していると服部が教室に入ってきた。

服部「やっと部屋の整理が出来たんだ。ところでお前らなんの話
しをしてるんだ？」

俺「警備部って言う部活の話だよ。」

服部「ああ、あのクソ部活のことか。あいつら見てると吐き気がする
ぜ！」

服部が警備部の愚痴を言っているとホントに警備部のやつらが教室
の中に入ってきた。

警備「服部雅彦だな？」

服部「またお前らか！なんのようだ？」

警備「お前を逮捕する！」

服部「ガハハハ。お前ら警備ごっこのおかげでとうとう頭もおかしくなっちまったようだな！だったら逮捕状持ってこいよな」

すると警備部のやつらは一枚の紙を俺達に見せた。
その紙にはこう書かれていた。

「服部雅彦！校内での痴漢及び女子更衣室の覗きの疑い。」

警備「さあ！我々と来てもらおうか！」

服部「アーメン！」

警備「それともう一人！平島唯！お前も逮捕状が出てるぞ」

俺「ちょっと待ってください！服部はともかく何故唯まで逮捕されなきゃならないんだ！納得のいく説明しろよ！！」

俺がそう言うと警備部の連中はまたまた逮捕状を見せてきた。

「平島唯！校内でギターを振り回し6人の生徒に怪我を負わせた！」

俺「でたらめ言うな！唯がそんなことするはずねえだろ！！唯こんなやつらほかっところぞ。」

警備「犯人の味方をする気か？」

俺「誰が犯人だ！だいたいお前らがそうやって生徒を逮捕すること事態がおかしいぜ！」

警備「お前警備部にたてつく気か？」

俺「ああ、唯がそんなことするはずないからな」

警備「上等だ！よしこいつも逮捕しろ！！」

犯人をかばった罪だ」

澤「ちょっと待ってくれ！それはちょっとおかしいだろ！！」

俺「澤！あとのことは俺に任せろ！それよりこの事を山中校長に伝えといてよ」

そう言い終わると俺と唯は手に手錠をかけられ連れていかれた。

服部はと言うと体中を鎖でグルグルまきだった。

唯は今にも泣きだしそうだった。

俺「心配しなくて大丈夫だよ！こいつらのやってることは間違ってる。唯は罪なんか犯してない」

だが唯はしょんぼりしたままだった。

俺は学校のエレベーターで地下一階にある警備部の牢獄にぶち込まれた。

唯と服部は何故か別の場所に連れていかれてしまった。

俺「おい！なんで俺だけこんなとこに閉じ込められないかんのだ？」

俺はこのときからどうもこの警備部の存在がおかしく思えた。

風紀のことならちゃんと風紀員がいるのに：。

俺「まさかやつらの狙いはハナから！」

「：そう。：：あなたよ。」

俺「誰だ！！」

声のする方を見ると金髪の少女が立っていた。

俺「：：俺を殺しに来たのか？」

少女「：：違う。牢獄から出る。変身すれば簡単だろ？」

俺「何故俺を逃がす？君がいるってことはこれはショッカーの仕業か？」

少女「：そう。警備部の連中はショッカーの戦闘員が化けたもの：。あなたの仲間を捕まえてあなたを怒らせるのが目的：」

俺「何故俺を怒らせる必要がある？」

少女「：：いづれわかる。あなたの力が今のままで終わらないってことが：

それからもう一つ：私はこういうやり方が嫌い：」

そう言うと少女は姿を消した。

俺は変身し牢獄をぶち破ると仲間の元へ急いだ。

第二十八話 変身!炎のガンマン(前書き)

ショットカー刑務隊長「マグガン」の手により仲間達が処刑されようとしたとき仮面ライダー sunshineの身に異変が起こる。

果たして彼はどうなってしまうのか!!

第二十八話 変身！炎のガンマン

警備部の連中のあとをつけていくとそこにはまたエレベーターがあった。

俺はそのエレベーターに乗りまたまた下に下った。

エレベーターが止まるとそこにはかなり大きな鉄の扉があり俺はその扉を開けた。

するとそこには警備部の連中と服部と唯に他の仲間まで捕まっていた。

ライダー「罫達まで何故だ!？」

警備「我らにたてつくやつは皆死刑にしてやる！」

ライダー「警備部! いやショックカーのザコ共正体を現したらどうなんだ!」

警備「クソ! 何故俺達の新の姿を知ってるんだ?」

ライダー「金髪の少女が教えてくれたんだ。お前達にはクイーンと言った方がわかるかな。」

警備「何故クイーン様が我らを裏切る?」

ライダー「お前らのやり方は気に入らないんだと。じゃあそろそろ行くぜ!」

俺はそう言い終わると警備部の連中の懷に飛び込み思いっきり蹴りを放った。

警備部の連中（戦闘員）は無事に片付いた。

俺が唯の手錠を取ろうとすると俺の周りにまたまた牢獄が現れた。

そして一体の怪人が姿を現した。

その怪人は右手にショットガンを左手にマグナムを装着していた。

「貴様が街の噂の仮面ライダーか。やっと会えたな。俺の名はショットカー刑務部隊長の「マグガン」だ。」

ライダー「ショットカー刑務部隊だど！」

マグガン「そうだ。お前の仲間はこれから我がショットカーの華麗なる処刑で命を落とすことになる。」

ライダー「だが俺の仲間はここにいるぞ。」

マグガン「フハハハよくその仲間とやらを見ろ！」

俺は唯に目をやるとそれは唯の形をした人形だった。

マグガン「本物はここだ!!！」

マグガンの方を見ると俺の仲間が一人一人ロープで縛られていた。

ライダー「卑怯者め!! 仲間を離せ! お前の目的は俺だろうか!？」

マグガン「まあ吠えるなよ。仮面ライダー! お前はあの牢獄の中で

仲間が死んでいくのを見ておくがいい。」

マグガンは戦闘員に何やら命令している。

戦闘員の一人が何かのリモコンのスイッチを押した。

するとそこには首吊り台や電気椅子が現れた。

マグガン「まず最初はお前だ！」

唯が首吊り台に連れて行かれる。

このままでは唯が殺されてしまう。

俺は牢獄をぶち破ろうとしたがビクともしない。

マグガン「お前の力を計算して作ってある。そう簡単には壊れまい。フハハハ」

俺はだんだん無力な自分に腹が立って来た。

ライダー「うおおー」

しかし牢はやはり壊れない。

唯が首吊り台に上がった。

マグガン「最後に言い残したいことはあるか？」

唯は顔を上に上げると大きな声で叫んだ。

唯「君におごってもらったアイス今までで一番おいしかった。あり

がとう」

憂「お姉ちゃん!!」

服部「唯ちゃん!」

みんな「唯!」

ライダー「うおおー神よー!!!」

俺がそう叫んだ途端に不思議なことが起こった。

あの例の何も書かれていないSDが光り出したのだった!!

SDはライダーSDと交代するように俺のベルトに入っていた。

その途端俺の体から激しい炎が燃え上がり牢獄の鉄を溶かした。

マグガン「お前は何者だ!?!」

ライダー「俺は炎の神。仮面ライダー sunshine ファイヤ
フォームだ!!」

マグガン「戦闘員共!ライダーを殺せ!」

戦闘員「イイ」

ライダー「ファイヤーフラッシュ!!」

ファイヤーフラッシュをくらった戦闘員は黒こげになった。

俺はSDロードに新たなSD「シューティング」を差し込んだ。

S D ロードがハンドガンに変形した。

ライダー「マグガン！表に出ろ！！お前の悪事を燃やし尽くしてやる！！」

マグガン「上等だ！！仮面ライダーかかって来い！！」

こうして仮面ライダー対マグガンの激しい銃撃戦が始まろうとしていた。

第二十八話 変身! 炎のガンマン (後書き)

仮面ライダー sunshine ファイヤーフォームについて

ファイヤーフォームは6000℃の高熱炎を操ることが出来る。

必殺技はファイヤースューティングから放つ「バーニングシュート」で巨大な火球で相手を燃やし尽くす。

第二十九話 No. 1の作品（前書き）

新たな変身を遂げた仮面ライダー sunshine にマグガンの銃
口が迫る！！

負けるな！仮面ライダー sunshine！！

第二十九話 No. 1の作品

地下を抜けて地上に上がった俺とマグガンは銃撃戦を始めた。

マグガンは右手と左手を重ねるとやつの手に装着されている銃の銃口が光り出した。

マグガン「ショットマグナム!!」

そのかけ声と共にやつの銃から強烈なエネルギー弾が放たれた。

それをなんとか避けた俺はやつに炎の弾丸を放った。

さすが銃に慣れているだけのことはある。

やつは俺の銃弾をことごとくかわすところに向かってエネルギー弾を連続で放ってくる。

やつのエネルギー弾は俺の背後にあるコンクリートの壁をもぶち抜いている。

（一発でも当たったらまずいな！）

俺はやつのエネルギー弾を避けながら頭の中で作戦を考えた。考え抜いた結果一つの方法を思いついた。

上手いかどうかは半分半分というところだろう。

俺はやつがエネルギーをチャージしているあいだにやつの立っている周りの地面めがけて何発もの火球を放った。

おかげでやつの周りは激しい土煙が舞いやつは俺のいる位置がわからないためうかつに銃を打つことは出来ない。

俺は土煙が消える前に勝負に出た。

俺は銃にライドアップSDを差し込んで空中高くジャンプした。

ライダー「狙うはやつの頭だ!!」

俺は土煙が舞っている中のやつの頭上に銃口を合わせた。

ライダー「くらえ!!」

バーニングシューター!!!!」

俺は銃から巨大な火球をやつめがけて放った。

地面は大爆発を起こしたあとしばらく燃えていたがそこにはマグガンの姿は無かった。

どうやら逃げられたらしい。

俺は変身を解除するとみんなの捕まっている地下に行きみんなのロープをほどくと地下を後にした。

その頃ショッカー地下基地では何やら怪しげな会話がされていた。

Dr. ジャ「どうだった? キングの力は?」

マグガン「はい。かなりのものでした。私と銃撃戦をして生きて帰

って行ったやつは、やつが初めてです。」

？「マグガン！貴様失敗したな！失敗したものは死を持って償うのを知っているな。」

D r. ジャ「お待ちくださいボス。このマグガンは私が今まで作り出した中でもN o. 1の作品です。」

ボス「だからなんだと言うのだ！！」

D r. ジャ「どうか今一つのチャンスを」

ボス「良からう！ただし次に失敗したら貴様は必ず死刑だ！！」

マグガン「承知しました。」

なんとマグガンは生きていたのだった！！

マグガンの登場といい今回の件といいショッカーのやり方はますます汚くなっている。

学校に戻ると山中校長が待っていた。

本物の警備部の連中は学校の裏にあるプールの更衣室に縛り付けられていた。

まあなんにしても一件落着であった。

その次の日、いつものように学校に行くと教室にはまた服部はいなかった。

俺「また部屋の掃除か？」

紬「そうみたい。大変ね」

律「でもあいつがないのもそれはそれで平和だな。」

澪「それ言えてるよな！」

俺達が話していると2階の服部室からものすごい音がした。

俺達は服部室の前まで行くと中から服部の慌てふためく声がした。

服部「あー俺の1900年もののコーラが……このポンコツ冷蔵庫が……！」

そう言うとなんか服部は冷蔵庫に向かって説教を始めた。

はあー冷蔵庫に説教してどうすんだよ。

また次の日、服部は学校を休んだ。

原因は腐ったコーラを飲んで腹痛をおこしたらしい。

第二十九話 No. 1の作品（後書き）

マグガン

マグガンはDr. ジャイロが作り出した。

SDを差し込んで人間が変身してるわけでは無く体の100%がサイボーグと言ってもおかしくない。

目的はムーンライトやショッカーと同じように仮面ライダーsun shineを倒すことだ。

第三十話 夏休みの合宿（前書き）

マグガンとの戦いを終えた主人公は夏休みを満喫していた。

軽音部のみんなと服部と合宿の約束をしていた主人公だったがテレビのニュースを見て合宿先で次々と行方不明者が出ていることを知る。

まさか！ショッカーの仕業か！！

第三十話 夏休みの合宿

マグガンとの戦いから三週間が過ぎた。

学校は夏休みに入り校舎の中はいつもよりかなり静かだった。

俺はというと今だにお世話になっている唯と憂の家の中の掃除をしていた。

さすが夏だけのことはあるクソ暑い！

クーラーを電源を入れたいが唯はクーラーが苦手らしいのだ。

憂はこの日、学校の友達と街のデパートに買い物に行っていて家にいるのは掃除をしている俺とリビングでゴロゴロしてる唯の二人だった。

こうして唯と二人でいるのも、もうすっかり慣れてしまった。

俺「唯、冷蔵庫にあるアイス食べるか」

唯は床の上をゴロゴロしながらうなずいた。

俺は唯にアイスを持っていくと唯は俺にこう言った。

唯「食べさせてよ」

俺「はあゝ仕方ないな。」

こうやって唯にアイスを食べさせるのもこの夏休みに入ってからほぼ毎日のことになっていた。

アイスを食べる彼女の笑顔は俺の胸に何故かキュンと来るほど可愛かった。

唯「明日はみんなと合宿だね」

俺「いいのか？軽音部の合宿に俺が行っても」

唯「いいよ。いいよ。だって服部君も軽音部じゃないし」

俺「まあ、そりゃそうだけど……」

俺はすっかり忘れていた。

あの服部も来るのだった！

やつが行くところ必ず何か問題が起きる！

今回はなるべくやつにかかわらないようにしよう。

俺はそう心に誓った。

テレビをつけるとニュースがやっていた。

テレビ「最近、○○海岸で泳いだりサーフィンを楽しんでいるお客様が突然姿を消すと言うおかしな事件がおこっています」

唯「あれ！この海岸で明日、私達が合宿に行く場所の近くの海岸だよ。

ニュースによると行方不明者はもう25人にも増えている。

俺はまた嫌な予感がしてきた。

（まさか……ショッカーの仕業か？）

ここのおととなしなかったのにやはり何か悪だくみをしていたに違いない。

唯「こういう人がいなくなる事件で前にもあったよね。」

俺「えっ！そうだったけ？」

唯「ほら、うちの学校の運動部のエース達と妹の憂が拉致された事件だよ」

俺は思い出した。

なんたってその事件は俺が唯達と出会って初めて自分が仮面ライダーに変身したときのことだからだ。

俺「懐かしいな。あの時から全て始まったような気がするよ。」

そのときだった。

いきなりリビングの電話が鳴り俺は電話に出た。

電話の相手は服部だった。

服部「あれ、平沢さんのお宅だよな？」

俺「いいえ、違いますよ。」

俺は電話を切った。

プルルル

ガチャ

俺「はい。平沢ですけど……」

服部「やっぱり平沢さんじゃね〜か〜！」
俺「なんか用か？」

服部「合宿行く前にちょっと唯ちゃんとデートしたくってな〜」

俺は電話を即切った。

全くせっかくの休みをあのカマキリ野郎に邪魔されてたまるか!!

結局その日はあっけなく終わり俺は次の日の合宿に持って行く荷物を準備するとその日は早く眠りについた。

例の海岸では新たに行方不明者が出てるとも知らずに……

第三十一話 海を調査せよ！（前書き）

紬の別荘に着くとさっそく海で泳ごうと言い出す服部の言葉に仕方なく海に迎う主人公達であった。

海はとても綺麗でなかなかのところだったが……

第三十一話 海を調査せよ!

次の日の朝、俺と唯は約束の集合場所に迎った。

そこにはもうみんないてあとはバスを待つだけだった。

みんなの持ち物はだいたい着替えや楽器などだったがただ一人妙に大きなリュックサックを背負い夏なのに長袖に長ズボンという格好のやつがいた。

たぶんみんなわかると思うが教えておく服部だ。

俺「服部そのリュックには何が入ってるの？」

服部「あゝ知りてえか？」

俺「あゝ別に教えたくないならいいけど……」

服部「仕方がねえから教えてやるよ合宿中に飲めるコーラとバスの中で飲むスポーツドリンクにそれから……」

相変わらずのドリンクバカだった。

しかも挙げ句の果てに着替えなどはいっさい持ってきてないという。

俺が服部と話し終わると一人の老人が俺に訪ねてきた。

老人「〇〇海岸に行くバスは次に来るやつでいいのかな？」

俺「そうですよ。俺達も丁度そこに行くところなんです。おじいさんも〇〇海岸ですか？」

老人「ええ、息子を探しにね」

俺「息子さんどうかしたんですか？」

老人の話しを聞くとどうやら老人の息子は2日前に友達と〇〇海岸へ遊びに行ったきり帰ってこないという。

どうやら例のニュースの行方不明者の一人のようだ。

老人は悲しそうにバスが来るのを待っていた。

それから10分後にバスがきた。

俺達はバスの中でお菓子を食べながら盛り上がっていた。

中でも隣の席の服部はやかましいというレベルではもうなかった。

濡が黙らせてくれたからいいものの先が思いやられる。

バスで一時間ぐらいすると目的地に着いた。

合宿場は紬の家の別荘だった。

別荘の中に入ると服部はいたるところを走り回っていた。

服部「こりゃたまんねえぜーファイヤー」

服部は紬に抱きついた。

服部「ムギチャーン将来は俺の妻で決まりだな」

紬「やめなさい。汚らわしい。」

紬は笑っていたが俺はその光景が恐ろしかった。

服部「さあ、みんな！海に泳ぎに行こうぜ」

俺「ちょっと待てよ！海では次々と行方不明者が出てるんだぞ。知らないのか？」

服部「はあゝ何が？」

俺「・・・もういいよ」

結局、海に泳ぎに行くことになった俺達は水着に着替えると海まで歩き出した。

それにしても服部のやつ水着も持ってきてないのにどうする気なんだ？

俺はふと服部の方を見た。

嫌な物を見てしまった。

服部がニヤニヤしながらカメラのレンズを磨いている！

（コイツ最初から盗撮が狙いか！！）

服部は俺の視線に気がつく俺に言った。

服部「はあゝ何見てんだゝ？」

もうコイツにはしばらく振れないでおこう。

海に着いた。

ニユースのせいか人は俺達を合わせて10人ぐらいしかいなかった。

とりあえず俺は準備運動をするとゴーグルを付け海に潜った。

海の中はいたって普通だった。

特に怪しいところもなく結構綺麗な海だった。

俺が海面に顔を出すと砂浜の方にいる唯が手を振ってくれた。

俺はひとまず砂浜の方に行き唯達と遊んでいた。

あれこれ1時間30分ぐらいが過ぎたときのことだった。

沖の方から突然叫び声が聞こえた。

「助けてくれー」

俺は急いで声のする方まで泳いで行くと一人の若者が海の底に引きずられるところだった。

俺は若者を掴むとなんとか海面まで上げようとしたが何かが若者の

足を引っぱってるようでビクともしない。

俺「くっ、なんて力だ！」

とうとう若者は海に沈んでしまった。

海面に潜ったがもうそこには何も無かった。

その日も新たに行方不明者の数を増やしてしまった。

正直悔しかった。

俺がしょぼんとしていると唯が声をかけてくれた。

唯「元気だしなよ」

俺「結局俺は何にもできなかった……」

唯「誰だっけどうにもならないときはあるよ。明日もどっちみち海に潜るんでしょ？ 私も協力するよ」

俺「いいのか？」

唯「うん。」

俺はこのときから唯のことが自分の中で特別になっていた。

彼女は俺に力を与えてくれる何故かそんな気がしてなかった。

明日こそ絶対に行方不明者の謎を解いてみせる！

俺はそう決心した。

俺「ところで唯練習は？」

唯「あっ忘れてた」

第三十二話 獲物（前書き）

次の日、朝一で海に潜った俺と唯は一人のサーフィンをしている青年に出会った。

その青年の妙な言葉が気になり後をつける主人公であったが……

第三十二話 獲物

次の日の朝から俺と唯は海に潜ったがやはり手がかりはつかめなかった。

海に潜り始めて2時間ぐらいがたった。

俺と唯は一端浜辺に上がり少し休んでいた。

唯「何も見つからないねえ」

俺「そうだな。こりゃかなり手こずりそうだ。」

俺達が話しているとどこから現れたのか一人の青年が波に乗りサーフィンを楽しんでいた。

青年は俺達がいることに気がつく俺達の方にやってきた。

青年「やあ、君達。こんなに朝早くからどうしたんだい？」

俺「お兄さんこそこんな朝早くからサーフィンするなんてよっぽどサーフィンが好きなんですね。」

青年「まあな。だが俺がサーフィンしてるのはただ好きなだけじゃないんだ。」

唯「じゃあ他に理由があるんですか？」

唯がそう訪ねると青年がにっこり微笑んで俺達に言った。

青年「獲物を探してるんだよ：」

俺「!！」唯「!！」

青年「アハハ、冗談だよ。冗談。じゃあ俺はまたサーフィンを楽しんでくるよ」

そう言うとき青年は海の方に走って行ってしまった。

だが俺は青年のさっきの言葉が頭に引っかかっていた。

どうも冗談には聞こえなかったのだ。

俺「唯悪いが先に別荘に戻っててくれないか。」

唯「ええ、なんで？」

俺「ちよつと気になることがあるんだ。」

唯「でも……」

俺「心配すんなよ。あと少し潜ったら俺も別荘に戻るから」

唯「わかった。じゃあ気をつけてね」

俺は唯と別れるときさっきの青年の後を追って海に潜った。

しかし青年はどこにもいない。

諦めて俺が海から上がろうとすると何かが俺の足を掴んでいた!!

俺「クソ!このままでは引きずり込まれてしまう!!」

俺は腹部に手をあてベルトを出現させた。

俺「変身!!」

俺は変身すると自分の足を思いつきり引っぱった。

俺の足を掴んでいたのはサメ怪人だった。

ライダー「やっと姿を見せたな。ショッカー!」

鮫怪人「おのれ、貴様仮面ライダーだったのか!予想以上の大物が釣れたぜ!」

ライダー「行方不明者のいる場所まで案内してもらおうか?」

鮫怪人「嫌だと言ったら?」

ライダー「力ずくで教えてもらう!!」

俺は鮫怪人をなんとか陸におびき寄せようとしたがなかなか上手くいかない。

水中では絶対にこっちが不利だ。

そう考えた俺はある考えを思いついた。それは鮫怪人にわざと負けて気を失ったふりをし行方不明者の居場所を突き止めるという考え

だ。

鮫怪人はどんどん俺を沖に引っ張っていつてくれた。

鮫怪人は水中に俺を掴んだまま潜った。

俺はだんだん息苦しくなりとうとう本当に気を失ってしまった。

第三十三話 悲しい過去（前書き）

アジトの中で意識を取り戻した主人公は金髪の少女から自分の過去を知らされることになる。

アジトの牢獄に閉じ込められている行方不明者を助け出した主人公だったが……

第三十三話 悲しい過去

意識を失ってどれくらいたっただろうか。

俺が目を覚ますとそこは何かの実験場所のようなところだった。

俺「ここはいったい!!」

「ここはショッカーの人体実験場」

声のする方を見ると金髪の少女がいた。

俺「何故、俺はこんな場所に」

少女「この部屋を見ても何も思い出さない？」

俺「思い出すも何もここに来るのは初めてだし……」

少女「違う。」

俺「何が違うんだ？」

少女「……あなたはこの部屋で記憶を失ったの」

俺「!!」

金髪の少女は静かに話し始めた。

少女「あの日、私とあなたはこの部屋でD r. ジャイロの人体実験

を受けた。」

俺「なんの実験だ？」

少女「簡単に言えばSDカードを人間の脳に入れられるかどうかの実験」

俺「でもなんのために人間の脳にSDカードを入れなきゃいけないんだ？」

少女「人間を自分の思うがままに動かすため。そして私も脳にSDを入れられた。」

俺「君の脳に入ってるってことは俺の脳にもそれが…」

少女「：あなたの脳には入ってない。あなたの脳にSDをセットする瞬間に機械が壊れてあなたは記憶を失った…」

俺「そうだったのか。じゃあ君は今も頭の中にSDが…」

少女「おかげで体も思うように動かないときもある…」

少女はとても悲しそうにそう呟やいた。

まさにかごの中に閉じ込められている鳥のようだった。

少女「でも私はいつか必ずショッカーを…Dr. ジャイロをこの手で倒す！」

俺「ショッカーはわかるがDr. ジャイロに恨みでもあるのか？」

少女「やつのつまらない実験のせいで私は妹を失った：」

俺は何も聞けなかった。

この少女は好きでショッカーに従ってた訳ではないのだ。

俺「とりあえず俺はこの場所から脱出しなきゃならない。鮫怪人がさらった人達はどこにいる？」

少女「このアジトの牢獄の中：」

俺「わかった。礼を言うよ。」

俺が牢獄に迎おうとすると少女が俺に何か手渡した。

それは一つのSDカードだった。

少女「そのSDも元はあなたの物：：SDの力を引き出すにはあなたの感情が必要：」

そう言い残すと少女は消えてしまった。

俺は牢獄に迎え出した。

牢獄に着くと見張りの戦闘員が2人いた。

俺は戦闘員に向かって小石を投げやつらの注意を引きつけた。

戦闘員が石を気にしている間に俺はやつらを気絶させ鍵を奪い牢獄の戸を開けた。捕らわれていた人達を救出すると俺はアジトの出口

までみんなを案内した。

みんなが出るのを確認した俺はアジトを潰すためにD r. ジャイロ達のいる部屋を探し回った。

アジトの一番奥の大きな部屋に進入すると案の定D r. ジャイロがいた。

俺「見つけたぞ！D r. ジャイロ」

D r. 「さすがはキングだ。よくここまで嗅ぎつけたな。だが：」

D r. ジャイロを追い詰めようとしたがそこに二人の影が邪魔をした。

一人はさっきのサーフィンの青年ともう一人はこの間倒しそこねたマグガンだった。

青年「君も俺の獲物だよ」

俺「やはりあんたショッカーの仲間だったか！」

マグガン「仮面ライダー！この前のかりを返させてもらう！」

青年はS Dの力で鮫怪人に変わった。

俺「何故、海で遊ぶ人達を捕まえた？」

鮫怪人「邪魔だったんだよ！俺のサーフィンの」

2体の怪人は俺に襲いかかってきた。

俺「変身!!」

俺は変身すると2体の怪人をアジトの外へ連れ出した。

俺は「ファイヤー」SDをベルトのセットするとファイヤーフォームに変身した。

まずはマグガンとの決着をつけるべく俺は銃撃戦に持ち込んだ。

マグガンはやはり銃撃戦に長けていてなかなか隙がないし鮫怪人が邪魔をしてくる。

ライダー「こうなったら二人まとめてぶっ飛ばしてやる!!」

俺は銃にライドアップSDを差し込んだ。

ライダー「バーニングシューター!!」

火球は一直線に二人の怪人を襲った。

しかし鮫怪人は海に逃げ込みマグガンは間一髪よけていた。

マグガン「そう易々と負けてたまるか!」

ライダー「なかなか根性見せるじゃねえか!正直参ったぜ」

必殺技をよけられ2人の怪人の攻撃が来る!

どうする仮面ライダー!!

第三十四話 イメージ（前書き）

2体の怪人を相手に苦戦している主人公の前にムーンライトが現れた。

彼女は味方なのかまたもや敵なのか……

第三十四話 イメージ

2体の怪人はどんどん俺に迫ってくる。

マグガン「とどめだ！仮面ライダー！！」

マグガンが放ったエネルギー弾が俺目掛けてとんでくる！！

しかし、エネルギー弾は俺に当たる瞬間にはじけてしまった。

別のエネルギー弾がマグガンのエネルギー弾を粉碎してくれたのだ。

俺を助けてくれたのはムーンライトだった。

ライダー「ムーンライト助けてくれるのか？」

ムーン「：勘違いしないで：：私はやつが気にいらない：」

ムーンライトはマグガンの目の前に立ちはだかった。

ムーン「あなたは鯨の方を：：」

ライダー「おう！！任せとけ！」

俺は鯨怪人にバーニングシューターを放ったがやはり水の中では効かないようだ。

鯨怪人「ライダー！どうやらもうなすすべがないようだな」

ライダー「うるせー勝負はこれからだ！」

マグガン「クイーン様そこをどいて下さい。私の相手は仮面ライダーです！」

ムーン「あなたの目的は知っている。キングを倒し自分がキングになるつもり……でもさせない！」

マグガン「はあ、全くあなたには手を出すつもりはありませんでしたが……ライダーの前に始末してあげましょう……」

ムーン「：始末されるのは……あなたの方」

ムーンはマグガンの銃攻撃を全て剣ではじいていた。

さすがもう一人の仮面ライダーだ！

だが俺の方はどうすればいいのか全然いい案が思いつかない！俺がやみくもに突っ込もうとしたときムーンライトが俺に言った。

ムーン「：さっき渡したSDを使って……」

ライダー「でもこれこのSD何も書かれてないぞ！」

ムーン「……イメージして……」

ライダー「何を？」

ムーン「……水中戦を……」

俺はSDを手に持ち水中戦を頭の中でイメージしてみた。

すると前のようにSDが光りだした。

俺はそのSDをベルトに差し込むと今度は炎ではなく水に囲まれ変身した。

鮫怪人「なんだ！？お前は？」

ライダー「俺は水の神……仮面ライダー sunshine ウォーターフォーム！！」

ムーン「…どうやら成功したみたいですネ…」

マグガン「フン、よそ見してていいんですか？」

ムーン「…安心しなさい…退屈はさせない…」

そう言うとムーンライトは物凄い速さでマグガンの後ろに周りこむとマグガンに向かってムーンライトフラッシュを放った。マグガン「残念ですが、このパーフェクトサイボーグの私に目くらましは効きませんよ」

ムーン「…それはどうでしょうか…」

マグガンがムーンライトに向かって銃を放とうとしているがマグガンの様子がおかしい。

マグガン「何故だ！エネルギーがたまらないだー！！」

ムーン「…私のフラッシュは相手のエネルギーを一点の場所に集中

できなくさせる力がある：もう銃は打てまい：」

マグガン「おのれ」

ムーンライトは剣にライドアップSDを差した。

ムーン「：ギガムーンライト：」

ムーンライトはマグガンを真つ二つに切ってしまった。

マグガンは爆発した。

ムーン「：パーフェクトサイボーグの最後：」

ムーンライトが勝ったのを確認した俺はSDロードに「ロープ」SDをセットした。

SDロードはたちまち水で出来たロープに変わった。

俺は鯨怪人をロープで縛ると空に上げて思いっきり海面に叩きつけた。

鯨怪人「ぐおお！今のでベルトにヒビが！？」

俺はウォーターロープにライドアップSDを差し込んだ。

ライダー「ウォータートルネード！！」

俺はウォーターロープを超高速で頭の上で回し水の竜巻を作った。

怪人はどんどん上に上げられていく。

俺は怪人が竜巻の上まで来たところをロープで叩きつけた。

その瞬間、鯨怪人は爆発し元の青年に戻った。

俺は警察に青年の身柄を引き渡すと金髪の少女に礼を言った。

俺「さっきは助かったよ。やっぱり君は強いな。」

少女「：これで私はショッカーのアジトに帰れなくなりました。」

俺「これからどうするんだ？」

少女「：目の前の道を歩いて行きたいと思います。：死んだ妹が
そうしたように：」

そう言うと彼女は姿を消した。

彼女の亡くなった妹さんのためにも俺はショッカーを叩き潰す決意
を新たにし仲間の待っている別荘に戻った。

第三十四話 イメージ（後書き）

仮面ライダー sunshine 「ウォーターフォーム」について

「ウォーター」SDを使って仮面ライダー sunshine が変身した姿。

武器の「ウォーターロープ」は水の力で出来たロープだ。

必殺技はウォーターロープを頭上で高速回転させ水の竜巻を作る「ウォータートルネード」だ！！

第三十五話 守るもの（前書き）

仮面ライダー sunshineにとって守らなければならないものは自分の近くにいる大切な仲間だ。

仲間のためならどんな怪人がこようと彼は負けない！

第三十五話 守るもの

合宿が終わり俺達は荷物をまとめてバス停に迎った。

バス停では来るときに会った老人が息子さんといっしょにバスを待っていた。

老人は俺に気づくと軽く会釈をしバスに乗った。

服部「ガハハ。水着のお姉さんの写真が結構撮れたぜ！始業式の日
に軽く売りさばいてやるか」

服部が少し訳のわからないことを言っているがもう慣れてしまった。

俺は隣の席の唯に話しかけようとしたが唯は疲れがたまったのか眠っていた。

唯の頭が俺の肩に当たっている。

服部はそれを見て隣の席の紬に言った。

服部「ムギちゃん俺の肩で眠らないか？」

紬「……」

紬は無視していた。

まあそれが一番いい方法であろう。

バスに乗って一時間ぐらいがたち俺達は無事に自分達の街に帰ってきた。

俺達はバスを降りそれぞれの家の方向に帰って行った。

唯の家に帰ると憂ちゃんが夕飯の準備をしていた。

やはりしっかりした妹だ。

（前々から思っていたが）

俺は自分の部屋に戻り今までに倒した怪人のSDを自然に見ていた。

どいつもこいつも強敵ばかりだった。

怪人のSDを眺め始めると色々なことが頭に浮かんできてしまう。

俺は怪人のSDを見終わると次にDr. ジャイロのことを考えていた。

（いったいやつの目的は何なんだ？何故街の人にSDを配る？）

そうこう考えてるうちに憂の声がした。

どうやら食事の時間ようだ。

まあ、今俺がやることは目の前に出てくる敵から俺の大切なものを守るだけだ。

その頃ショッカーのアジトでは……

首領「D r. ジャイロ!! マグガンがやられたそうだな」

D r. 「はい。ですが私にはまだ自分が作り出したSDがあります。」

首領「クイーンはどうする? マグガンを倒したのはクイーンだぞ! やつはショッカーの裏切り者だ!」

D r. 「ご安心を首領。やつの頭には私の言うことを聞くようにプログラムされたSDが入っております。」

首領「ふん。もしクイーンまでもが仮面ライダーに負けたらどうするつもりだ?」

D r. 「そのときは私自らが……」

マグガンを倒されD r. ジャイロは首領に大目玉をくらっていた。

これでやつも今まで以上に本気で来るだろう。

負けるな! 仮面ライダー!!

第三十六話 植物園の老婆（前書き）

街の植物園で子供達が行方をくらますという事件がおこった。

主人公は服部といっしょに植物園を調査しに出かける。

第三十六話 植物園の老婆

合宿が終わり夏休みが8月の後半になったころ、この街ではまた不吉な事件が起きていた。

それはこの街の植物園に入った子供達が次々と行方をくらますという事件だった。

山中「もう今日で19人目か……」

俺「子供達だけが行方をくらますというのもちよっと怪しいな」

服部「ガハハ！考え過ぎだ。きっと反抗期が来たんだ。」

俺「5歳や6歳の子がか？」

服部「うーんどうやら反抗期ではなさそうだな」

俺と服部と山中校長がクーラーのきいた職員室で話していると律がすごい勢いで職員室の戸を開け入ってきた。

律「た、大変なんだ!!」

俺「何が大変なんだ？」

律「弟が昨日から行方不明なんだ!!」

服部「ガハハ。どうせ親子喧嘩かなんかだろー違うか」

律「昨日は親子喧嘩なんかしてない!!」

それより昨日弟が行方をくらました場所は……」

どうやら律の弟が消えた場所は今話題の植物園だった。

律は俺の肩を掴むとすごい眼差しで俺に植物園を調べてくれと言った。

その日の午後に俺は服部と植物園に迎った。

植物園の中は見る限り普通の植物園だった。

俺達が植物園の中でキョロキョロしていると一人の老婆が話しかけてきた。

老婆「おやおや、お花を見にきたのかい？」

服部「ああ、そうだけど。なんかようか」

老婆「いいえ。ゆっくり見て行ってください。」

俺「お婆さんはここの関係者ですか？」

老婆「ここは私が管理する植物園さ」

老婆はそう言うのと植物園の奥の方に行ってしまった。

俺達も奥に行こうとしたとき俺の袖を引っ張ってくるやつがいた。

振り返るとそれは6歳ぐらいの男の子だった。

俺「坊やどうしたの？」

男の子「お兄ちゃん達、あのお婆さんの後を着けない方がいいよ。」

俺「何故だい？」

男の子「みんなが消えたのはあのお婆さんの仕業なんだ！」

俺がもう少し詳しく聞こうとすると服部が邪魔をした。

服部「お前なく俺達をからかってるのか？」

男の子「僕は嘘なんて付いてないよ！」

服部「なんだと！このガキ！」

俺「よせ！服部。」

服部「お前、このガキの言うことを信じるのか？まだ6歳ぐらいのガキの言うことだぞ」

俺「純粋な子供の言うことだからこそ信じれるんだ！服部はこの子といっしょに植物園を出てくれ。」

服部「お前はどうすんだ？」

俺「あの老婆の後をつける！」俺は服部と男の子が植物園から出るのを見届けると急いで老婆の後をつけた。

老婆は植物園の奥のさらに奥に行くと花壇に咲いている花畑に入って行った。

俺はしばらく老婆を監視していると老婆はその花一本ずつに水をやり出した。

俺が驚いたのはその後だった。

その花の一本一本が「助けてゝ助けてゝ」と囁いている。

そしてその花のとなりにある看板をよく見るとそこにはなんと行方をくらましたはずの子供達の名前が書いてあった。

やはりあの男の子の言ってたことは本当だった。

子供達を助けたいがまずはあの花に変えられた子供達を元に戻す方法を探すのが先だ！！

俺は再び老婆のあとをつけて行った。

植物園の一番奥についた。

その花壇には大きな一つの穴があり老婆はそこに入って行った。

やつらのアジトの場所はわかった。

後はあの老婆の真の姿を見るだけだ。

俺はその日、植物園を後にするとまず律に今日の調査の結果を報告した。

律はいつもみたいな元気がなくしょんぼりしていた。

弟が花に変えられたのが相当ショックだったらしい。

服部の話しではあの後、男の子はさらに老婆がお花の怪人になったところを見たという情報が入った。

この事件の黒幕はショッカーだったのだ！

世の宝である子供達を花に変えるショッカーはいったい何を企んでいるのか？

仮面ライダーはあの花怪人に勝てるのだろうか！

第三十七話 この世の宝（前書き）

子供達を花から元に戻すために昨日老婆が消えた穴の中に侵入した
主人公。

果たして子供達を元に戻すことは可能なのだろうか？

第三十七話 この世の宝

俺は次の日も植物園に迎った。

その日は園内に昨日の老婆はいなく客の姿も見当たらなかった。

俺は老婆が昨日消えた穴の中を降りていった。

穴の中はかなり広かった。

どんどん奥に行くとそこには一つの部屋があった。

部屋の扉には「薬室」と書いてあった。

扉を開け部屋の中に入るとそこにはたくさんの薬があった。

その中の一つにどうやら子供達を元に戻す解毒薬のような物があるに違いない！

俺は学校のスクールバックにそこにある薬を全てつめるとその部屋を後にした。

俺はその薬を学校に持って行くと化学部の部長であり唯の友達である和に見せた。

解毒薬は30分ぐらいで見つかった。

俺は和に頼み解毒薬の量を増やしてもらった。

残るはあの老婆をおびき寄せるだけだ！

俺は老婆をおびき寄せる役を梓に頼み植物園の影に身を潜めた。

俺「いいか。危険になったらすぐに逃げろよ！」

梓「わかりました。先輩もドジらないで下さいよ！」

俺「ああ、任せとけ！」

梓は植物園の子供達が変わえられた花の前にやってきた。

しばらくするとどこからともなく例の老婆が現れた。

老婆は梓に話しかけた。

老婆「お嬢ちゃん。花が好きかい？」

梓「はい。でもこの花の名前ちょっと変わってますね」

老婆「フッフ、お嬢ちゃんもすぐにその花のお仲間入りだよ！」

老婆は腰にベルトを巻くとSDを差した。

老婆の姿が花怪人に変身した。

花怪人「さあ、お嬢ちゃんこっちにおいで」

梓は後ずさりをするが花怪人はどんどん迫ってくる。

花怪人「さあ、もう後が無いよ！」

梓「何で子供達を花に変えちゃうんですか！なんでこんなこと……」

花怪人「私はこの世の宝である子供達をもっと綺麗な花に変えてやったのさ！さあ、お喋りはここまでだ！花に変えてやる！」

ライダー「そこまでだ！花怪人！」

花怪人「おやおや誰かと思えば仮面ライダーじゃないか！」

ライダー「貴様は勘違いをしている！子供達は子供達だからこそこの世の宝なんだ。」

花怪人「何が言いたいんだ？」

ライダー「子供達を花に変えた貴様の行為はこの世の宝を綺麗にしたんじゃない！けなしたんだ！」

花怪人「おのれ！口から出任せ言いやがって！」

ライダー「出任せじゃないさ！その証拠に花にされた子供達を見ろ！泣いてるぜ！」子供達は前のように助けてと囁いていた。

花怪人「くそーこうなればお前も花にしてやる！」

ライダー「梓！怪人は俺に任せろ！その間に子供達に解毒薬をかけろ。」

俺は花怪人を蹴り飛ばし植物園の奥に誘いこんだ。

花怪人は自分の手をムチにすると振り回してきた。

ライダー「そんなムチ切り刻んでやるよ！」

俺は剣でムチを切ると次に花怪人の顔の花びらを一枚一枚抜きまくった。

花怪人「貴様、よくも花びらを！」

ライダー「どうやらその花びらが無ければ子供達を花にすることはできんらしいな。」

花びらを失った花怪人は穴の中に逃げ込んだ。

ライダー「逃がさん！あぶり出してやる！」

俺は「ウォーターフォーム」にチェンジすると穴の中に大量の水を流し込んだ！

穴の中はあっという間に水だらけになり花怪人は大量の水と一緒に噴き出てきた。

ライダー「そろそろとどめだな！」

俺は「ファイヤーフォーム」にチェンジすると銃にライドアップSDを差した。

ライダー「バーニングシューター！！！」

俺が放った炎の火球は花怪人に直撃して花怪人は大爆発した。

ライダー「お前の悪事もこれでチェックメイト！」

俺は老婆から花怪人のSDを奪った。

俺は倒れた老婆を起こそうとすると老婆の体は溶け出してしまった！！

ライダー「これはいったいどういうことだ！」

そのときだった。

植物園内に聞き覚えのある声が響きわたった。

Dr. 「仮面ライダー！その老婆は私の実験の一つだよ。」

ライダー「実験の一つ？どういうことだ？」

Dr. 「その老婆は100年も前に心臓が止まっていた。それをこの私が蘇生させたんだ」

ライダー「馬鹿な！そんなことが出来る訳がない！」

Dr. 「不可能を可能にするのがこのDr. ジャイロ様だよ。フフ
フいずれまた会おう。仮面ライダー！」

Dr. ジャイロの声は消えた。

俺は変身を解除すると梓達と合流した。

花に変えられた子供達も元に戻り元気に自分たちの家まで帰って行った。

律も弟が帰ってきたと大喜びであった。

だがショックをむきながら次の手を考えているに違いない！

戦え！仮面ライダー sunshine！

第三十七話 この世の宝（後書き）

D r. ジャイロの実験

D r. ジャイロはS Dの研究以外にも数多くの研究をしていたことが今回の事件でわかった。

死人を生き返らせる蘇生実験など普通では不可能な研究ばかりだ。

いったいやつは何者なのだろうか？

第三十八話 無敵の水人間!! (前書き)

夏休みがあと一週間で終わってしまうという時期に俺は梓と街にあるプールに出かけたがそこでまた新たな事件が起こる!!

第三十八話 無敵の水人間!!

植物園の事件から3日がたち夏休みもほんとに最後の一週間になった。

今日、俺と梓は街一番のプール「ビッグマウンテンプール」に来ていた。

夏休みだけあってすごい人の数だった。

俺「唯達も呼べばよかったな」

梓「たまには2人でもいいじゃないですか。」

俺「まあ、今回は植物園で囃役になってもらったこともあるしな。」

梓「そんなことより早く泳ぎましょうよ。」

俺は梓に引っ張られるとプールの中に入っていた。

こうして3時間ぐらいがたっただろうか。

俺達がプールから引き上げようとするとプールの方がやけに騒がしかった。

俺達がプールに行ってみるとそこには信じられない光景があった。

それは、プールで遊んでた人が水の塊のような物に飲み込まれてい

たのだった！

俺「これはいったいどういうことだ！！」

水の塊は人間を3人ぐらい飲み込むとプールからロッカールームの方へ走って行ってしまった。

後を追いかけて行くと水の塊はいきなり俺に襲いかかって来た！！

俺は水の塊を避けると水の塊は人の形に変形した。

俺「お前！ ショッカーか？」

水「……」

俺「飲み込んだ人間を解放しろ！！」

水「……」

水人間は何も答えない。

だが、飲み込まれた人達をこのままにしておくわけにはいかない。

俺はベルトを出現させるとSDを差して変身した。

俺は水人間にパンチをかましたが俺の拳はやつの体をすり抜けてしまった！！

ライダー「なんてこった！ 攻撃がでкин！！」

俺はSDロードを剣に変えると水人間を剣で切ったがやはりすり抜けてしまった。

ライダー「こうなればこれをくらえ!!」

俺はSDロードにライドアップSDを差した。

ライダー「sunshineエクスプロージョン!!」

俺の爆発キックをくらった水人間はキックをくらったものの飛び散った液体が塊再生してしまった。

ライダー「ちくしょう!こいつはかなりの強敵かもな!」

水人間はまたもや俺に飛びかかってきたが俺はそれをまた避け対策を考えた。

ライダー「水には水でやってみるか!」

俺はウォーターフォームにチェンジするとウォーターロープで水人間をひっぱたいた。

しかし、水人間はやはり俺の攻撃をすり抜けてしまった。

俺はファイヤーフォームにチェンジした。ファイヤーフォームの強力な火力でやつを蒸発させようという作戦だ。

俺はファイヤーシューティングを手につとやつめがけて火球を发射した。

ところが水人間は俺の火球をも飲み込んでしまった。

ライダー「くそー！お前、食い意地はりすぎだぞ！！」

俺がそう叫んでいると梓が走ってきた。

水人間は梓に飛びかかっていった。

ライダー「おい！お前の相手は俺だぞ！！」

俺はいそいで梓の目の前に立つと梓を押し倒してなんとか水人間から守ることに成功した。

だが水人間はその隙に俺に飛びかかってきた。

ライダー「しまっ……」

しまったと言ったときにはすでに俺は水人間の体内にいた。

やつの体内では先ほど飲み込まれた人達がいた。

俺は体内を攻撃したがやはりすり抜けてしまう。

これは今までの中で一番ピンチかもしれない。

俺が途方にくれているとやつの体内にはまだ奥に続いている道があることがわかった。

俺はその道をたどって行くことにした。

第三十九話 人体実験の恐怖（前書き）

水人間の体内を突き破ることに成功した主人公は体内に閉じ込められた人達を助けるとショッカーのアジトに迎った。

第三十九話

人体実験の恐怖

俺は水人間の体内にある道をどんどん奥へ進んで行った。

するとそこには大きな水の結晶のような物が一つありその結晶の中にはSDカードを持った少女が閉じ込められていた。

少女は目を閉じていて生きているのかもわからない状態だった。

結晶の真上を見るとそこには一筋の光が見えていた。

もしかすると出口かもしれないと思った俺はその光にむかってジャンプした。

ところがそこは出口ではなくまだ水人間の体内だった。

俺の目の前には大きな人間の脳のようなものが置かれていた。

おそらく今俺がいるのは水人間の脳であろう。

ライダー「これを破壊すれば水人間を倒せるかもしれん！」

俺はその大きな脳に目掛けて必殺キックを放った。

水人間の脳は碎け散った。

その瞬間、俺や他の

人達は水人間の体内から脱出することができた。

ライダー「さあ、みんな早く逃げるんだ！」

俺はみんなを逃がすとさっきの少女とSDカードを探した。

しかし、少女もSDカードもどこにもなかった。

ライダー「おかしい！水人間の体は無くなったのに少女はどこにいったんだ？」

俺が辺りを見回していると水人間の散った水が宙に浮きどこかに移動しだした。

ライダー「あの水をたどれば少女の居場所がわかるかもしれない！」

俺はマシンに乗ると宙に浮いた水の後を追跡した。

水はどんどん先に行き街はずれの森林の中に入ってしまった。

俺は森林の中を調べると森林の中の一本の木の根元に大きな穴ができていた。

俺はその穴の中に入ってしまった。

穴の中はかなり広い地下通路になっていた。

俺が地下通路をうろちよろしていると通路の影から戦闘員が現れた。

戦闘員「か：仮面ライダー！！何故ここに！？」

ライダー「そうか！ここはショッカーのアジトだったのか！！」

俺は逃げる戦闘員を捕まえるとD r. ジャイロの居場所をはかせた。
このアジトにもどうやら実験室があるようだ。

俺は実験室の戸をぶち破るとそこにはさっきの少女がいた。

少女はカプセルに入れられていてやはり生きがあるのかは不明の状態だった。

D r. 「よくきたね。仮面ライダー。」

俺が振り向くとそこにはD r. ジャイロが立っていた。

ライダー「D r. ジャイロ！このカプセルの中の少女は生きてるのか？」

D r. 「フッフ、まあ生きていることは生きてるがほぼ植物人間の状態だ」

ライダー「これも貴様の人体実験か？」

D r. 「私はこの少女の脳に水に関する全ての情報をつめたSDを移植したのだよ。」

ライダー「貴様！」

D r. 「ところがSDに入っている情報があまりにも多く少女の脳は破裂してしまったのだ。今彼女が生きていれるのはあのカプセル

のおかげだ」

ライダー「お前はそうやって今まで何人の人間を人体実験に利用したんだ!!」

D r. 「フッフ、全ては私がこの世界を手に入れるためだ!」

ライダー「やはり貴様は許せん!! ここで息の根を止めてやる!!」

俺がD r. ジャイロに蹴りを入れるとやつはカプセルを破壊した!!

カプセルが破壊された途端、少女が持っていたSDは少女の体内に入ってしまった。

少女は水怪人に変わった。

俺は逃げようとするD r. ジャイロの白衣を引っ張った。

するとやつの白衣から一つのSDカードが落ちた。

ライダー「このSDは俺がもらったおく! 水怪人を倒したら今度は必ず貴様を倒す!」

D r. 「おのれ!! 覚えていろ!!」

D r. ジャイロは姿を消した。

俺は水怪人といっしょに地下通路の天井を突き破ると外に出た。

仮面ライダーVS水怪人の戦いの始まりだ!!

第四十話 落雷！稲妻の戦士（前書き）

水怪人には理性がなくやつはアジトのいたるところを破壊し始めた！

やつの破壊作業を止めろ！！

第四十話 落雷！稲妻の戦士

水怪人は理性が無いのかアジトの中をめちゃくちゃに暴れ始めた。

しかも水人間のときとは違いかなりのパワーだった。

地下通路は水怪人のはく水でもう浸水状態だった。

仕方なく俺は水怪人を掴むと地上まで一気にジャンプした。

水怪人は俺の手をなぎはらうと俺に襲いかかってきた！

俺は水怪人の一直線の攻撃を避けると水怪人の腹目掛けて膝蹴りをかました。

しかし、水人間のとくと同じようにやつは俺の攻撃をすり抜けてしまう。

ライダー「このままでは勝てんぞ！！」

水怪人「ぐおおー！！」

水怪人が雄叫びをあげると空がいきなり曇りだし大量の雨が降りだした。

水怪人はその雨を自分の頭上で止めると一気に俺の方目掛けてその雨をぶつけてきた！

この雨はどういう訳か針のように痛く俺はかなりのダメージを食ら

ってしまった。

どうしようもなくやつの前でぐったりしていた俺はDr. ジャイロの白衣のポケットから奪ったSDのことを思い出した。

そのSDには名前はなくまだ新品のようだった。

俺は前にムーンライトに教わったようにそのSDに自分のイメージを流し込んだ。

するとSDは光り出した。

イメージが成功したのだ。

SDには「サンダー」と刻まれていた。

俺は早速そのSDをベルトに差し込んだ。

差し込んだ瞬間俺の頭上に落雷が落ちてきた！

だがその落雷こそ新たなフォームチェンジの合図のようなものだったのだ。

ライダー「俺は稲妻の神。仮面ライダー sunshineサンダーフォーム……！」

俺がフォームチェンジしたのも関係なく水怪人はまた俺に飛びかかってきた。

俺はその攻撃を食い止めるとそのまま水怪人の体に電流を流した。

水怪人の体には電流が走っているのがよくわかった。

どうやらこの攻撃は効いているようだ。

俺はSDロードに「アックス」SDを差した。

するとロードは大きな斧に変わった。

俺は水怪人に斧を振りかざした。

水怪人の体にまた電流が走る！さすが「サンダーアックス」だ。

ライダー「よし！とどめだ！」

俺はアックスにライドアップSDを差し込んだ。

ライダー「サンダーストライク！！」

俺はその一撃で水怪人を倒すことが出来た。

水怪人は倒れて元の少女に戻っていたがもうその少女は冷たくなっていた。

俺はそのときまた自分の体中に怒りが走るのがわかった。
ショッカーのやることは今まででもひどかったが今回ののはそれ以上だった。

特にDr.ジャイロ！

やつは絶対に許せん！俺はその少女をかつぐと森林を後にした。

少女の息は止まっているのに彼女の目からは一粒の水滴がこぼれ落ちた。

それがただの水滴だったのかそれとも彼女が流した涙なのかは今の俺にもわからない。

だがショックが血も涙も無いと言うことは今回のことでよくわかった。

俺はその一人一人を全力で叩き潰すことを今ここで再び誓った。

第四十話 落雷！稲妻の戦士（後書き）

サンダーフォームについて

サンダーフォームは怪人の体内に電流をながしたり電気や雷を自由自在に操ることができるフォームだ。

武器は斧型の「サンダーアックス」で切れ味は電気メスのように鮮やかだ。

必殺技はサンダーアックスに全電力を流しこみ相手を切り飛ばす「サンダー 스트ライク」だ！

第四十一話 マラソン大会前の嵐（前書き）

夏休みが終わり主人公の通う学校では毎年恒例のマラソン大会が始まろうとしていた。

だがそのマラソン大会で何故か主人公は仮面ライダーに変身しなくてはならなくなる。

第四十一話 マラソン大会前の嵐

D r. ジャイロの人体実験室を破壊してから約三週間が経過した。

夏休みが終わり9月の中旬になった。

ところで今俺が通っている桜高校ではこの時期になると毎年恒例のマラソン大会というものがあるらしい。

服部「あゝだりゝ何がマラソン大会だ！なめてんのかゝ」

唯「マラソン大会嫌だなく誰か雨でも降らしてくれないかなゝ」

最近ではいつものように唯と服部が一日中こうやって呟いていた。

まあ気持ちはわかる。はつきり言って俺もやりたくない人間の一人だからだ。

マラソン大会の前日になったこの日に軽音部に一人の客が来た。

それは陸上部三年の清原先輩だった。

清原「平島唯さんはいるかい？」

紬「唯ちゃんならまだ来てないですよ」

服部「三年のあんたが唯ちゃんになんの用だゝ？」

服部はまだ用件も聞いてないのにすでに清原先輩に牙を向けていた。

清原「ちよつと唯さんに聞いてほしいことがあってね。ずっと前から言いたかったことなんだ。」

服部「おつとそれを言わせる訳にはいかねえな。とつと帰れよな。」

俺「まあまあ、服部そう興奮するなよ！」

服部「お前は黙って紅茶でも飲んでろよな。」

もうこうなつた服部はどうしようもない！
俺が困っているとそこに唯がやってきた。

唯「ムギちゃーんケーキちょうだい」

清原「平島唯さんだね？」

唯「そうだけど。何か用？」

清原「実はずっと前から君に言いたいことが……モグモグ」

服部が清原先輩の口をふさいでいる。

服部「唯ちゃんこんなやつ言葉なんて聞く必要ねえよ」

清原「全く！君は何故僕の邪魔をするんだ！？」

服部「お前は唯ちゃんに告白するつもりだろ？そうは問屋がよろさねえぜ！！」

紬「あの〜とにかく話しが落ち着くまで部室の外でやってきてくれませんか？」

清原「わかったよ！」

おい！お前外に出ろ！！」

服部「あゝ上等だ！かかってこいよなゝ」

そう言い合々と清原先輩と服部は部室から出て行った。

俺「モテる男はつらいつて言うけど女も結構大変そうだね」

唯「なんのこと？」

天然の唯は何もきずいていないらしい。

天然は恐ろしい！

それからしばらくして服部が部室に戻ってきた。

俺「服部、話しはついたのか？」

服部「あのやろゝ勝手に話しをつけやがって！」

服部の話しでは明日のマラソン大会で清原先輩が俺達よりも先にゴール出来たら唯とデートさせてもらおうと言う条件だった。

梓「まさか、服部先輩その条件に応じたんですか？」

服部「ああ、勿論に決まってるだろ」

俺「どうすんだよ!! 相手は陸上部だぞ！
お前勝てるのかよ？」

服部「俺じゃねえよ。やつと競争するのは仮面ライダーさ」

律「そんなこと言っただって仮面ライダーが誰なのか知ってるのかよ？」

服部「ガハハ、知らねえな」

漣「この無責任！」

梓「全くです！」

困ったことになった。

仮面ライダーになればそりゃ陸上部に勝つことも簡単だろうがもし
マラソン大会に仮面ライダーが出場することになったらこの学園に
仮面ライダーがいることがバレちまう！

（はあ、服部のやつとんでもない約束してくれたもんだぜ）

俺「それよりも服部さんよく唯にはこの事話したのかよ？」

服部「ああ、そしたら簡単にOKしてくれたぜ」

（唯のやつわかってるのかな？ 自分がおかれている立場が）

俺はその夜なかなか眠れなかった。

唯に清原先輩と服部の取引のことを話すと唯は笑ってこう言った。

唯「大丈夫。仮面ライダーならば必ず私を守ってくれるよ」

（はぁーそうあてにされてもなー）

結局その夜、落ち着かない俺は外に飛び出し走り出していた。

もうどうにでもなりやがれー

第四十二話 マシンの秘密（前書き）

夜の街をランニングしている主人公の前に虎怪人が現れた。

変身して戦う主人公だったがやつのスピードについていけなく敗れてしまう。

第四十二話 マシンの秘密

外を走り出して20分ぐらいがたっていた。

俺は道の途中で横腹をおさえながら立ちすくんでいた。

（さすがに走り過ぎた）

俺が唯の家に戻ろうとしたとき俺の頬を引っ掻いたやつがいた。

俺「痛えー誰だ！正体を見せろ！！」

すると俺の目の前に一体の怪人が現れた。

顔を見る限り虎怪人てとこかな。

俺は仕方なく変身すると虎怪人にまず文句を言った。

ライダー「出てくるなら昼間にしてくれよな！全く礼儀のわからんやつだ。」

虎怪人「うるさい！仮面ライダー！！」

ライダー「お前の目的を聞こうか？」

虎怪人「俺の任務は貴様を明日のマラソン大会に出場させないことだ！」

ライダー「ふん、俺だって出たくて出る訳じゃねえんだ！」

虎怪人「お喋りはこれぐらいにしようや。行くぞ！ライダー！」

虎怪人は猛スピードで俺に突進をかましてきた！

虎だけにさすがにスピードが早い！

目でも追いつけない部分があるくらいだった。

虎怪人の猛突進を5回ぐらいくらった俺はさすがにピンチを隠せなかった。

（スピードが早すぎる！）

虎怪人「ライダーこれでも明日のマラソン大会に出るとでも言うのか？」

ライダー「俺には明日の大会で守らなきゃならない人がいるんだ！」

虎怪人「俺だって貴様に絶対勝たなきゃならん！」

ライダー「何故明日のマラソン大会をそこまで気にする？」

虎怪人「俺のこの後の人生がかかっているとでも言っておこうか。」

まともに走ってもやつのはかなわない！

俺はマシンに乗るとマシンごと相手に突っ込んだ。

ところがやつはそれを軽々よけてしまった。

どうやら反射神経もいいらしい。

俺のマシンの攻撃をかわした虎怪人は俺に明日のことをくどく言う
と去って言ってしまった。

ライダー「マラソン大会に出るな？ いったいどういう意味なんだ！
」

次の日の朝がやってきた。

天気は晴れで唯がベランダに吊した逆さのてるてる坊主も効かなか
ったようで唯は非常に残念そうだった。

俺はこの日いつもより30分ぐらい早く登校すると化学部の部長で
あり生徒会の役員でもある和を探した。

学校に着くと和はマラソン大会の準備を他の生徒会の生徒と行って
いた。

俺は役員のテントをはっている和に昨日の夜の出来事を話した。

俺「と言う訳でやつみたい俺のスピードを上げる方法とか無いか
な？」

和「バイクで戦えばどうかしら？」

俺「昨日の夜試してみたがやつに軽々とよけられちゃったんだ」

和「そうなの。……じゃあ、とうとうあれの出番かもしれないわね」

和はそう言うのと俺に一枚のSDカードをくれた。

俺「このSDは？」

和「あのマシンを開発したときについでに作っておいたものなの。」

俺「なんか普通のSDと違ってちよつとごつついな。どうやって使うんだ？」

和「そのSDをマシンに差せばマシンはあなたに力をくれるはずよ。」

俺は早速そのSDを学校の裏に置いておいたマシンにセットした。

するとマシンは変形を始めた。

マシンは煙とともに一個のタイマーのような物に変わった。

俺がそのタイマーを拾っていじっていると和が様子を見に来てくれた。

和「とりあえず変身してみて。」

俺「変身してどうするの？」

和「いいから変身してそのタイマーを腕に付けてみて。」

俺は言われるままに変身するとタイマーを腕に付けた。

和「タイマーのスイッチを入れてみて」

俺はタイマーのスイッチを入れると体中からエンジン音のようなものが響きわたり体がいつもよりも軽くなっていた。

俺「すっげー！なんだよこのタイマー！！体が軽くていつもよりも何倍も早く走れるぞ」

和「簡単に言えば今あなたは自分のマシンと一体化しているのよ。そのタイマーからあなたの体全体にマシンのエネルギーを送り込めるの」

俺「これならあの怪人にも対抗できそうだ！さすが和！天才は健在だな。」

和「そのタイマーにライドアップSDを差せばさらにスピードは上がるけどそうすると多分30秒が限界よ」

俺「わかった。じゃあその30秒はやつにとどめをさすときに使うよ。」

俺は変身を解除すると和達の手伝いに参加した。

しばらくすると唯達も登校してきた。

必ずマラソン大会を無事に終わらせなければ……俺の新たな力で！

第四十二話 マシンの秘密（後書き）

ソニックタイマーについて

ソニックタイマーはライダーのマシンに「ソニック」SDをセットすることでマシンがタイマーに変わった物である。

ソニックタイマーを腕に付けることでマシンのエネルギーがライダーの体内に蓄積されいつもよりも体が軽くなり猛スピードで活動出来るようになる。

第四十三話 猛スピード対決（前書き）

マラソン大会に出場した主人公は仮面ライダーに変身したままあつという間にゴールするが唯がマラソンの途中に虎怪人にさらわれてしまった。

服部の電話でやつが雑木林に逃げたことがわかった。

雑木林に急げ！

第四十三話 猛スピード対決

いよいよマラソン大会が始まった。

まず最初に山中校長のお言葉を5分ぐらい聞くと生徒達はみんなスタート位置に並んだ。

清原「唯さんはかならず僕のものにしてみせる！」

服部「ケッ勝手に言ってる！勝つのは仮面ライダーだ！」

（はあゝ暑苦しい）

スタートの合図のピストルが鳴った。

みんなは最初ペースを守ってゆっくり走っていたが俺は猛スピードで校門を出た。

梓「あっ先輩！最初から飛ばし過ぎですよ」

清原「ふん。もう一人勝負を降りたやつがいるよ」

服部「あの野郎ゝあとでお説教だゝ」

校門を出た俺は素早くベルトを出現させると変身した。

清原先輩達がやってきた。

服部「か、か仮面ライダー！俺ファンなんだゝサインくれよなゝ」

清原「待ってたよ。仮面ライダー！さあ勝負だ！！」

ライダー「本当にいいのかい？」

清原「男に二言はない！」

そう言うとき清原先輩はスタスタと走り出した。

ライダー「じゃあ加減はしないぜ！」

俺は猛スピードでその場を走り去ると清原を軽く抜かすと一位をキープしたままゴール目掛けて走り出した。

途中で給水コーナーがあり係の女子生徒が立っていた。

ライダー「よう！君達ジャージを見る限り一年生だね。」

一年「はい。それにしてもホントに仮面ライダーがマラソン大会に出てくるなんて思わなかった」

ライダー「俺も気が進まなかったんだけど出ないとうるさいやつがいてね。」

一年「私達ファンなんですよ。サインくれませんか？」

女子生徒は二人ともそれぞれジャージのポケットから自分の生徒手帳を取り出して頼んできた。

ライダー「そこまで言われちゃあしょうがないな」

俺は二人の手帳にサインをするとまた走り出した。

あっという間にゴールが見えてきて俺は後ろを気にしながら走っていたがまだ誰の姿も見えない。

ライダー「よっしゃーゴール！俺が一番ですよね？校長」

山中「もちろん。タイムも歴代の一位の中でもトップよ！」

俺は自分が一位になったことを確認すると校門を出て変身を解除するとまた校門の中に入り自分がゴールしたことにした。

それから15分ぐらいが経過して次々と生徒達がゴールしてきた。

俺がテントの下でくつろいでいると梓達がゴールしたまま俺の前に来ると慌てた声で言った。

梓「先輩大変です！唯先輩が行方不明です！！」

俺「何だったて！お前ら固まって走ってきたんじゃないのか？」

漑「途中で唯は清原先輩に誘われて二人で走り出しちゃったんだ！」

俺「あれ服部の姿も見えねーな」

律「服部ならあの二人を追っかけて行っちゃったんだ」

俺達が話し合っていると俺の携帯電話が鳴った。

俺「もしもし、服部か！今どこにいるんだ？」

服部「大変だ！清原のやつが虎の化け物になって唯ちゃんをかついでコースの途中の雑木林の中に走って行っちゃった！」

俺「わかった。雑木林だな！後は俺に任せてお前は早くゴールしろ！」

俺はマシンに乗ると雑木林に急いだ。

雑木林に行く途中にショックー戦闘員が襲いかかってきた。

俺「懲りないやつらだ！マシンの腕は俺の方が上だってことをわすれたか？」

俺はやつらを振り切ると雑木林に入って行った。

雑木林は広くやつがどっちの方向に行ったかわからなかった。

俺が迷っていると戦闘員達が追いついてきた！途中で給水コーナーがあり係の女子生徒が立っていた。

ライダー「よう！君達ジャージを見る限り一年生だね。」

一年「はい。それにしてもホントに仮面ライダーがマラソン大会に出てくるなんて思わなかった」

ライダー「俺も気が進まなかったんだけど出ないとうるさいやつがいてね。」

一年「私達ファンなんですよ。サインくれませんか？」

女子生徒は二人ともそれぞれジャージのポケットから自分の生徒手帳を取り出して頼んできた。

ライダー「そこまで言われちゃあしょうがないな」

俺は二人の手帳にサインをするとまた走り出した。

あっという間にゴールが見えてきて俺は後ろを気にしながら走っていたがまだ誰の姿も見えない。

ライダー「よっしゃーゴール！俺が一番ですよ？校長」

山中「もちろん。タイムも歴代の一位の中でもトップよ！」

俺は自分が一位になったことを確認すると校門を出て変身を解除するとまた校門の中に入り自分がゴールしたことにした。

それから15分ぐらいが経過して次々と生徒達がゴールしてきた。

俺がテントの下でくつろいでいると梓達がゴールしたまま俺の前に来ると慌てた声で言った。

梓「先輩大変です！唯先輩が行方不明です！！」

俺「何だったて！お前ら固まって走ってきたんじゃないのか？」

滯「途中で唯は清原先輩に誘われて二人で走り出しちゃったんだ！」

俺「あれ服部の姿も見えねーな」

律「服部ならあの二人を追っかけて行っちゃったんだ」

俺達が話し合っていると俺の携帯電話が鳴った。

俺「もしもし、服部か！今どこにいるんだ？」

服部「大変だ！清原のやつが虎の化け物になって唯ちゃんをかついでコースの途中の雑木林の中に走って行っちゃった！」

俺「わかった。雑木林だな！後は俺に任せてお前は早くゴールしろ！」

俺はマシンに乗ると雑木林に急いだ。

雑木林に行く途中にショックカー戦闘員が襲いかかってきた。

俺「懲りないやつらだ！マシンの腕は俺の方が上だってことをわすれたか？」

俺はやつらを振り切ると雑木林に入って行った。

雑木林は広くやつがどっちの方向に行ったかわからなかった。

俺が迷っていると戦闘員達が追いついてきた！

まずは戦闘員を倒すしかないようだ。

ライダー「仕方ねえから相手してやるよ！」

戦闘員「イイー」

第四十四話 ライダーVS虎怪人（前書き）

虎怪人を追い詰めたがやつのスピードはやはり早すぎる！

仮面ライダーは虎怪人の猛スピード突進を破ることができるのだろうか。

第四十四話 ライダーVS虎怪人

戦闘員達は絶妙なコンビネーション技で俺に襲いかかってくる。

ライダー「少しは成長したみたいだな。だがまだ甘い！」

俺はマシンをジャンプさせると一人の戦闘員にマシンをぶつけもう一人の方に俺の渾身の蹴りを放った。

戦闘員は2人倒れたがまだ残り6人ぐらい残っている。

戦闘員達は自分のバイクでバリケードを作って道を封鎖した。

ライダー「それで道をふさいだつもりか？」

俺はマシンのアクセルを全開にするとマシンをウィリーさせた。

ライダー「サンライトニングウィリー!!！」

俺のマシンは見事に戦闘員のバリケードを破ると先に急いだ。

雑木林の奥の方で虎の鳴き声がした！

俺は急いで鳴き声の方向に迎うとそこには唯をかついだ虎怪人がいた。

虎怪人「来たな！仮面ライダー!!！」

ライダー「清原！唯を離せ!!！」

虎怪人「マラソンではお前が勝った。いや勝たせたと言った方がいいかな。」

ライダー「勝たせた？　どういうことだ！」

虎怪人「全ては仮面ライダーを唯さんから引き離す計画だったのさ！　僕が唯さんを簡単にさらえるようにするための」

ライダー「あんたどうやら陸上部の部員としては優秀らしいが一人の男としては最低だ！」

虎怪人「君に何がわかる？　僕はこの学校に入ってからずっと彼女のが好きだったんだ！　この気持ちが変わるかー！！！」

ライダー「わからん！　他人の気持ちなんて誰にもわからないさ。でもあんたのやっている行動は間違っている！」

虎怪人「黙れ黙れ！！　もういい。貴様の命を奪い唯さんは俺のものにする！」

ライダー「あいにくそうはさせねえ。何故なら俺は唯を守らねーとまらないからだ」

虎怪人は昨日と同じように猛スピードで突進してきた！

（くそく相変わらず早すぎだろ！！）

俺は虎怪人の動きを目で追っているとやつは俺の右腕に噛みついた。

ライダー「ぐあああ」

虎怪人「このまま腕を噛み千切ってやる!!」

俺はとっさに「サンダー」SDをセットした。

サンダーフォームになった俺は右腕に電流を流した。

虎怪人「うああーライダーのやつまだこんな手を残していたのか!」

俺の腕からはかなりの血が流れていた。

(どうやらそう長くは戦えなさそうだな!)

虎怪人「次こそ噛み千切ってやる!」

虎怪人が迫ってくる。

俺はマシンに和からもらった「ソニック」SDを差した。

マシンがタイマーに変わり俺はタイマーを左腕に付けた。

その瞬間、虎怪人の猛スピード突進を俺は軽くよけた。

虎怪人「何!ライダーのスピードが上がった!!」

俺は虎怪人に接近するとパンチとキックを10発ずつ腹に入れた。

ライダー「スピードだけじゃない。攻撃スピードも前とは比べものにならないぞ!」

虎怪人「くそー食らえ!タイガーファイヤー!!」

虎怪人は口から火を吹いた。

俺は体を駒のように回転させ火をかき消した。

ライダー「さあ、とどめだ！」

俺はソニックタイマーにライドアップSDを差した。

その瞬間俺の体は音速状態になった。

どうやら虎怪人にも見えてないらしい。

俺は虎怪人の懐に時間があるかぎり左手でパンチを連打した。

30秒がたち音速状態がとけた。

俺は計78発の左ストレートを放っていた。

やつのベルトにひびが入ったと思ったらやつは爆発しもとの清原に戻った。

勝負がついたのだった。

第四十四話 ライダーVS虎怪人（後書き）

ソニックタイマーについてその2

ソニックタイマーにライドアップSDをセットすると30秒だけ音速状態になることが出来る。

必殺技は音速状態で放つ「ソニックナックル」だ。

第四十五話 広い星空（前書き）

虎怪人を倒し変身を解除して気を失っている唯を起こそうとすると
虎怪人だった清原が目を覚まし俺達に襲いかかってきた！！

第四十五話 広い星空

俺は変身を解除すると清原から虎怪人のSDを奪った。

俺は眠っている唯を起こした。

唯「……ここどこ?」

唯は寝ぼけていて虎怪人のことなどもあまり覚えていないらしい。

そのとき清原が目を覚ました!

清原「唯さんは俺のものだ〜!」

まずい! 清原は完全に暴走している!!

だがそこに服部がやってきた。

服部「清原〜! 覚悟しやがれ〜」

服部は自分が持っているエアガンで清原を打ちまくった。

服部「くらえ〜とどめの催眠ガス!」

服部は催眠ガスを投げてしまった。

催眠ガスを清原と一緒に吸ってしまった俺はいつの間にか眠っていた。

目が覚めると俺は学校のグラウンドのテントの中に横たわっていた。

虎怪人に噛まれた右腕も誰かが手当てをしてくれていた。

梓「先輩。気がつきましたか？」

俺「ああ、全く服部の催眠ガスのせいで酷いめにあった。」

俺は梓に清原がどうなったか聞くとやつは三週間の停学と陸上部をクビにされるというかなり重い処分をくらっていた。

俺「唯はどうなった？」

梓「唯先輩ならテントの外にいますよ。この腕の手当ても唯先輩がやってくれたんですから。」

俺は体を起こすとテントから出た。

外はもう暗くなっていてほとんどの生徒も下校していた。

でもただ一人テントの外で空に浮かんでいる星を眺めている生徒がいた。

それは言うまでもなく唯だった。

俺「今日は星が綺麗だな」

唯「そうだね。腕痛くない？」

俺「まだちょっとヒリヒリするけど誰かさんの手当てのおかげでか

なり助かったかな。」

唯「でもあの清原先輩が怪人だったなんて驚いたよ。」

俺「そうか。でも仮面ライダーが助けに来てくれてよかったじゃないか。」

唯「ライダーはすごいよね。マラソンでもちゃんと一位になってその後にも私を助けに来てくれたし」

俺「それがやつの指命だからな。そんなことより腕の手当てがありがとな」

唯「別にお礼なんていらないよ。でも似てるよねどこか。」

俺「えっ何が？」

唯「やっぱり何でもない。」

唯はまた星空を見始めた。

俺もその星空を眺めていた。

（やっぱり空は広いな）

こうしてマラソン大会は無事に幕を閉じることが出来た。

だがショッカーはもう次の手をうってきている。

戦え仮面ライダー sunshine!!

第四十六話 決闘前の質問（前書き）

仮面ライダーが倒して来た怪人の数はかなりのものになっていた。

ショッカーのアジトでは首領の怒り声が響きわたっていた。

そして主人公の前にまた金髪の少女が現れた。

第四十六話 決闘前の質問

ショッカーのアジトはこの街のいたるところにある。

仮面ライダーが潰したアジトの数はまだ序の口であった。

首領「おい！Dr. ジャイロ！いつになったら仮面ライダーを始末できるのだ！？」

Dr. 「首領しかしライダーは元々私達の仲間ですよ。私の実験が失敗してキングがああなってしまったのです。」

首領「なら貴様を死刑にしたっていいんだぞ！どうなんだ！」

Dr. 「お待ちください首領！まだ私の作ったモンスターSDが残っています。ライダーと戦える怪人がいなくなったわけでは無いのですから。」

首領「うゝところでクイーンの居場所はわかったのか？やつもショッカーの裏切り者だぞ！」

Dr. 「ご安心ください。クイーンにかんしては既に手をうつてあります」

そのころマラソン大会が終わり俺の学校では文化祭の準備が行われていた。

軽音部のみんなはいつも以上にはりきって練習をしていた。

服部は服部で自分専用の「服部室」にこもり何やらまた何かを作っていた。

俺は特に部活には所属していないしこここのところショッカーも出て来ないので暇を持てあましていた。

今日も学校が終わると家に真っ先に帰る途中だった。

何故なら今日は憂と買い物約束があったからだ。

俺がコンビニの前を通ったときだった。

俺はある少女に呼び止められた。

それは金髪の少女だった。

少女「久しぶりですね。キング。」

俺「こんなところで何しているんだ？」

少女「覚えていますか？ここはあなたと私が初めて会った場所。」

俺「そういえば最初にお前と会ったのはこのコンビニの前だったよな」

少女「一つ聞いていいですか？」

俺「何だ？」

少女「あなたはD r. ジャイロに勝つ自信がありますか？」

俺「やつはどんな手を使ってでも倒す！やつの実験のおかげで何人もの人間が殺されてるからな。」

少女「……そうですか……」

少女は俺が質問に答えるとまた姿を消してしまった。

そのときの質問がまさかまたあいつと戦うことになるとは思ってなかった。

俺は憂との約束を思い出し急いで家に帰った。

D r. 「ヒヒヒ、ライダー今度こそ君の最後になりそうだ。何故ならやつは今までのどんなやつよりも強い!!」

第四十七話 背負う物（前書き）

買い物帰りに工事現場の上から主人公めがけて鉄鋼が落ちてきた！

いったい誰の仕業だろうか？

第四十七話 背負う物

家に着くと憂はもう買い物の準備をしていた。

俺「ごめん。遅くなって」

憂「大丈夫ですよ。まだ全然時間あるし」

俺は急いで私服に着替えると憂と一緒に買い物に出かけた。

スーパーはまだそこまで人もいなく買い物はスムーズに終わった。

俺と憂は話をしながら帰路に足を運んでいた。

工事現場を通りかかったときだった。

いきなり上空から鉄鋼が俺と憂を目掛けて落ちてきた!!

俺「危ない!!」

俺は憂をかかえると間一髪のところ鉄鋼を避けることが出来た。

俺「憂ちゃん、大丈夫？」

憂「イタタタ、左足をひねったみたいだけど多分大丈夫だよ」

俺は工事現場のビル上の方を見た。

するとそこには仮面ライダームーンライトの姿があった。

俺「ムーンライト！これは君が落としたのか？」

ムーン「……倒す」

俺「!？」

ムーン「：私はお前を倒す！」

ムーンライトはビルから飛び降りると俺目掛けて刃を向けてきた。

（憂ちゃんが目の前にいたが仕方が無い！状況が状況だからな。）

俺「変身!!」

俺は変身するとムーンライトの剣を受け止め投げ飛ばした。

憂「嘘。仮面ライダーの正体って……」

ライダー「憂ちゃん、黙っててごめん！でも今はやつを落ち着かせるしかないんだ」

ムーンライトはいつもよりも攻撃にパワーがあったそして……いつも以上の殺気だ。

ライダー「ムーンライト！いったい何があったんだ？」

ムーン「お前を倒せば：妹が戻ってくる！Dr. ジャイロがそう言った。」

ライダー「何だと!? やめろ! お前は騙されている。死んだ人間は蘇ることなんて出来ないんだ!」

ムーン「:聞く耳持ちません!」

ライダー「じゃあ力づくでとめてみせる!」

ムーンライトはいつも以上にスピードが速く攻撃もかなり重かった。

俺はやつのラッシュをガードするのがやっとだった。

ムーンライトは剣を空に突きつけた。

(いったい何をする気なんだ?)

俺がおとなしくその光景を見ていると空が曇りだし雷が俺の上に落ちた。

ムーン「勝負ありですね」

ライダー「それはどうかな? サンダー返し!!」

俺は雷が落ちる前に素早くサンダーフォームに変わっていたのだった。

そして雷を体で吸収するとその吸収した電気を相手に流し込む:これがサンダー返しだ。

ライダー「止めろ! ムーンライト君はやつに騙されている」

ムーン「:あなたの言っていることは正しいかもしれませんが」

ライダー「じゃあ何故俺と戦う？」

ムーン「あなたは戦いで背負っているものがありますか？」

ライダー「どういう意味だ」

ムーン「私は死んだ妹の復讐を背負って今まで戦ってきました。少しでもまだ可能性があるのなら私はあなたを：倒す！」

俺は今まで多くの怪人達と戦ってきたが俺は何のために戦っていたのか全然頭になかった。

ただ目の前の敵を叩きのめす。

それだけで本当に良かったのだろうか？

第四十八話 太陽VS月（前書き）

ショッカーはテレビ局を乗っ取り主人公をおびきよせた！

テレビ局の屋上ではライダーとムーンライトの激闘が始まる。

第四十八話 太陽VS月

ムーンライトの剣が俺に今にも降りかかろうとしている！

しかしここでやられるわけにはいかない。

ライダー「sunshineフラッシュ！」

俺はsunshineフラッシュをお見舞いするとそのすきに憂を担いでその場から退却した。

俺は憂を病院に連れて行った。

幸い骨折はしていなく俺は安心した。

しばらくすると唯が病院にやってきた。

唯「なんで憂に怪我なんてさせたの！！」

こんなに怒った唯は初めて見た。

俺「憂、ごめんな。」

ムーンライトの言う通り俺は結局今までただガムシヤラに戦っていただけかもしれない……

憂「私は大丈夫ですよ。あなたがいなかったら私はあの鉄鋼にやられてましたし」

唯「でも憂は怪我したじゃない！なんでそんなのんきなことが言えるの？」

憂「お姉ちゃんはわかってないよ。あのときクモ怪人に捕まった私や今まで怪人から人々を守ってたのは……」

俺「憂！そのことは言いから……」

そのとき病院のテレビからあるニュースが流れた。

なんとそのニュースによるとショッカーがテレビ局をとったらしい。

テレビ「テレビをご覧の皆様今日の午後8時からこのテレビ局の屋上でこの街を守る仮面ライダーとこの街を支配しようとする仮面ライダーが決闘を始めます。」

俺「いったいどういうことだ？」

そのときだった。

病院の窓の外からショッカー戦闘員が覗いていた！

俺は病院から出ると戦闘員を捕まえテレビのことをはかせた。

俺「おい！あのニュースはどういう意味だ！？」

戦闘員「ショッカーのクイーンムーンライト様がお前に最後の決闘を申しでたんだ！これでお前もおしまいグアァー」

やつとはもう戦うしかないらしいな。

唯「どうしたの？病院からいきなり出て行っちゃって。」

俺「唯、みんなによろしくと伝えてくれ」

唯「え？」

俺はマシンに乗るとテレビ局に急いだ。

テレビ局に入るとショックー戦闘員達が襲いかかってきた！

戦闘員はもはや俺の敵ではない！！

俺は戦闘員を全員片付けると屋上に急いだ。

屋上の前にはD r. ジャイロが待っていた。

俺「D r. ジャイロ！貴様みたいな卑怯なやつは許せん！」

D r. 「ククク、キング今相手にしなくちゃいけないのは私じゃないのさこの先にある相手のはずだ。さあ、行きたまえ」

俺「貴様に言われなくてもそのつもりだ！！」

俺は屋上の扉を開いた。屋上の扉を開けるとそこには金髪の少女が立っていた。

少女「…覚悟は出来ましたか？」

俺「ムーンライトお前の妹を助けたいという気持ちはわかる。だが俺にも守らなきゃならないものがある!!」

少女「そのために私と戦うと：？」

俺「そうするしか無いようだな」

俺「変身！」少女「変身！」

俺とムーンライトはお互いに剣で相手を斬り合った。

ライダー「くっ、やはりなかなかやるな」

ムーン「：あなたは私には絶対に勝てない」

ライダー「勝ってみせる！俺はこの街で出来た仲間のためにお前を倒す!!」

俺はライドアップSDをセットした。

ムーンライトもライドアップSDをセットした。

ライダー「sunshineエクスプロージョン！」

ムーン「ムーンライトスマッシュ！」

テレビ局の上空で大爆発がおこった。

しかしムーンライトは倒れなかった。

ライダー「やはりキックでも倒せないか」

ムーン「あなたと私の力はほぼ互角。でも私は勝ってみせる！」

負ける訳にはいかない！この街のためにも仲間のためにも絶対だ！

しかしそのときだったテレビ局の屋上がいきなり大爆発をおこした。

爆発は凄まじくムーンライトもライダーも消えてしまった。

Dr. 「クハハハ、死んだ！仮面ライダーもムーンライトもこっばみじんだ！」

しかしムーンライトは間一髪で助かっていた。

ムーン「Dr. ジャイロやはり貴様は卑怯者のようですね」

ムーンライトはまた夜の闇に消えていった。

テレビ局の下では街の人々が絶望てきな状態で燃え上がる屋上を見ている。

戦闘員「皆の者これで仮面ライダーはこの世からいなくなった。この街は我がショッカーのものだ。」

その日からショッカーはこの街を支配してしまった。

果たして仮面ライダーは生きているのだろうか？

第四十九話 仮面ライダー生死不明（前書き）

仮面ライダーはテレビ局の屋上でムーンライトと戦っている最中に Dr. ジャイロが仕掛けた爆弾の大爆発に巻き込まれ生死不明の状態になった。

仮面ライダーのいないこの街は今ショックカータウンに変わろうとしている。

第四十九話 仮面ライダー生死不明

俺の名前は「服部雅彦」

軽音部のファンクラブの会長であり仮面ライダーファン第1号でもあった。

昨日、仮面ライダーはテレビ局の屋上で爆発に巻き込まれ生死不明の状態になっちゃった。

ライダーがいなくなった次の日からこの街は地獄に変わっちゃった。

ショッカーがこの街を支配し始めたのだ。

ショッカーは俺の高校にも入ってくるなり俺や他の学生に核兵器や武器の組み立て作業などをさせていた。

梓「濤先輩、ライダーは……先輩は本当に死んじゃったのでしょうか？」

律「よせよ梓！！あいつは絶対生きてる。」

濤「律……。そうだな。今まで街のために誰よりも戦ってきたもんな。」

紬「そうですよ。だから梓ちゃん彼が帰ってくるのを待っててあげよう。」

梓「先輩……。そうですね。先輩が帰ってくるまでの辛抱ですね。」

戦闘員「そこ！話しをするな！とっとと作業を続けろ！！」

服部「あゝこんな街嫌だぜ。お前はどこいつちまったんだよ」

みんなはショッカーに言うことに絶えていた。

俺はもう限界だったけどな。

Dr.「どうだね、平島唯くん。ショッカーのクイーンになる気はないかね？」

唯「嫌です！私は今の街より前のみんなが生き生きしていた街の方が。」

Dr.「君や街の皆が頼りにしていた仮面ライダーは昨日の大爆発で死んだのだよ。何が言いたいかわかるかい？」

唯「うう……」

Dr.「この街にもう希望の光は無いのだよ！」

この街には車のかわりに戦車が走り、飛行機のかわりに戦闘機が空を飛ぶようになっていた。

街のみんなは怯え震えながらショッカーの言う通りに作業を続けていた。

俺はあいつが置いていったマシンを見てはマシンを洗いながら独り言を呟っていた。

服部「なあ、お前は今までこの街のみんなのために戦ってきたんだよな。なんできずいてやれなかったんだろうな！ああー」

俺は雄叫びをあげていた。

頼む仮面ライダー出て来てくれよ！

この街が地獄の街になっちゃう！！

俺達を助けてくれー仮面ライダー！！！！！！

第五十話 復活！不滅の男（前書き）

D r. ジャイロは唯と結婚してショッカーのキングになろうとしている。その上この街の資金を全てショッカーの物にしようとしている。

仮面ライダー生きているならこの街を再び守ってくれー！

第五十話 復活！不滅の男

D r. 「皆の集！明日このD r. ジャイロと平島唯の結婚式が決まった。」

服部 「ななな、何だどー！！」

梓 「唯先輩がそんなことO Kするはずが無い！」

漣 「何かの間違いじゃ……」

戦闘員 「そこ！うるさいぞ！！」

えらいことになっちまった。

なんとしても唯ちゃんを助けないと。

D r. 「それからこの街の市長よ、ワシの前に来い！」

市長 「は、はい。何でしょうか？」

D r. 「この街はもはや我々ショックカーの物になる！この街の資金を全てワシによこせ！」

市長 「そんな無茶な！」

D r. 「ワシの言うことが聞けんのか！ならばサイ怪人この街の子供達を痛めつけてこい！」

市長「止めてください！子供達に罪はありません。」

D r. 「ならばどうするのだ？」

市長「ううう」

服部「なんてこった！市長さんがおどされてるじゃねえか！！」

俺は市長さんを助けたかったが俺にはそれだけの力が無かった……ちくしょ。

澤「和、ライダーが生きているかわかる機械とか作れないか？」

和「悪いけどそれは私にも無理だわ。それより唯をなんとかしなきゃ」

梓「結婚式は今日の午後3時からだそうです」

そのころD r. ジャイロは市長をひどく痛めつけていた。

D r. 「どうなんだ！まだ首を縦にはふらんか！？」

市長「くう」

唯「やめて！これ以上やったら市長さん死んじゃうよ！！」

D r. 「女は口出しするな！！さあこれでもかー！！」

D r. ジャイロの拳が市長にあたる直前のことだった。

戦闘員「D r. ジャイロ様、結婚式の準備が出来ました。」

D r. 「うむ。すぐに行く。」

D r. ジャイロは嫌がる唯を強引に引っ張ると結婚式場に迎って行った。

服部「市長さん大丈夫か？」

市長「私は大丈夫だ：それよりあの子を助けてあげてくだされ」

服部「言われなくてもそのつもりだぜ。」

俺はライダーのマシンに乗ると結婚式に急いだ。

結婚式場はこの街にある巨大スタジアムの中で開かれた。

街中の人たちはスタジアムに集まり唯のことを気の毒そうに見ていた。

首領「ではこれより偉大なるショッカーの結婚式を始める！」

服部「クソゝ遅かったかゝ」

憂「お姉ちゃん！逃げてー」

律「誰か止めてくれー」

街の人達「仮面ライダー助けてくれー」D r. 「ククク、ほざけほざけ！ライダーは死んだのだー」

誰もが諦めかけていたそのときだった。

スタジアムの中に誰かの高笑いが響いた。

「ハッハハハ」

D r. 「な、何者だ！姿を現せ！」

その次の瞬間スタジアムの天井に一人の男の影が現れた。

D r. 「ば、馬鹿な……」

唯「：仮面ライダー」

ライダー「ショッカーの諸君。貴様らの計画はこの仮面ライダーS
unshineが打ち砕いてみせる！」

首領「ライダー！お前は死んだのでは無かったのか？」

ライダー「仮面ライダーは不滅だ！この世に悪がある限りな！」
スタジアムが正大な拍手で包まれた。

街の人達「仮面ライダーバンザイ！」

D r. 「おのれ！サイ怪人！ライダーを殺せ！」

サイ怪人が俺に襲いかかってきた。

俺はサイ怪人の角を掴むとスタジアムの上空へ投げ飛ばした。

俺は剣にライドアップSDを差した。

ライダー「メガsunshine!!」

サイ怪人はあっけなく爆発した。

ライダー「さあ、Dr. ジャイロ。唯から離れろ！」

Dr. 「くうくおのれー」

Dr. ジャイロは姿を消した。どうやら逃げたようだ。

ライダー「唯、大丈夫か？」

唯「信じてたよ。絶対に生きてるって」

ライダー「大事なものをおいて旅立つほど俺は馬鹿じゃないよ。」

スタジアムの中にショッカーの戦車が入ってきた。

ライダー「上等だ！一台ずつぶっ壊してやる!!」

仮面ライダーは戦車に迎って突っ込んで行った。

やはり彼はこの街の救世主だったのだ！

第五十一話 街のヒーロー（前書き）

街の危機に突如現れた仮面ライダー。

この街をショッカーの手から守り抜け！！

第五十一話 街のヒーロー

ライダー「バーニングシューター!!」

戦闘員「イイー!!」

仮面ライダーはファイヤーフォームになると戦闘員が操縦している戦車めがけて火球を放った。

戦車はこっぴみじんに砕けていく。

Dr. 「どうしたのだ! 貴様ら! 相手はたかが一人だろうが!!」

戦闘員「駄目です。ライダーは強すぎます。」

Dr. 「馬鹿者! 弱音をはくな! やつを倒してこの街を支配するのは我々ショッカーだ!!」

ライダー「ふん、そう上手く行くかな?」

戦闘機がライダー目掛けて急降下してきた!

ライダーはファイヤーフォームからサンダーフォームにチェンジした。

ライダーは戦闘機の上から落雷を落とした。

戦闘機も粉々に砕けた。

残るはD r. ジャイロが作った試作品の怪人達だ。

試作「ぐおおお」

試作怪人はライダー目掛けて突進してきた。

ライダーはウォーターフォームになると

試作怪人の周りに大量の水を放出した。

試作「ぐおお」

ライダー「所詮試作品か……だが生かしておくわけにはいかない！
！」

俺はライドアップSDをセットした。

ライダー「ウォータートルネード！！」

試作怪人は全員水に沈みショッカーの武器は全て使えなくなった。

D r. 「くそく仮面ライダー！次こそは必ず息の根を止めてみせる
！」

D r. ジャイロはそう言い残すとまた闇の中に消えていった。

俺は変身を解除するとみんなのところに迎った。

みんなの顔には笑顔が戻っていた。

それから街の人達の懸命な作業のおかげで街はまた元の姿に戻った。

首領「Dr. ジャイロ！やはり今回の作戦も失敗に終わったな！！この責任をどう取るのだ？」

Dr. 「首領。今回の作戦は仮面ライダーのデータを取るためのものです。」

首領「データを取る？どういうことだ？」

Dr. 「とうとうやつ……パーフェクトコンピューターの出番です。」

そのころ、平島家では仮面ライダーである俺の復活祝いが行われていた。

服部「ガハハハ！俺はわかってたぜ！お前が絶対に生きてるってな」

俺「本当かよ？」

梓「んなわけないじゃないですか。あんな大爆発だったんですよ。」

唯「そうだよ！私はてっきり……」

俺「そうか……ごめん」

律「まあまあ、ここは明るく盛大にやろうぜ！」

澤「そうだな。街も元に戻ったことだし」

紬「あなたは今じゃこの街のヒーローですものね」俺達がパーティーを楽しんでいるとこの前の戦いがテレビで再放送されていた。

憂「でも、凄い戦いでしたよね。」

律「ショッカーの連中をバツバツサとなぎはらったもんな！」

この日のパーティーは夜まで続いた。

こんなに楽しいのは久しぶりのことだった。

俺はいつか必ずD r. ジャイロを倒す！

そしてムーンライト：：彼女ともいつか決着を付けなくてはならないことに俺も気がついていた。

俺はどんなことがあってもやつらに負けるわけにはいかない！

この街を守るためにも。

第五十二話 コンピューターの挑戦（前書き）

街を危機から救った仮面ライダーの前に今度はコンピューター怪人が現れた。

やつは仮面ライダーに凄い自信で挑戦してきた。

やつにライダーの力を見せてやれ！

第五十二話 コンピューターの挑戦

ショッカーの街占領作戦を阻止してから一週間がたった。

街はまだ完全に元に戻ったわけではなく今日も街の人達が復興作業にかかっていた。

俺はこの日、唯に連れられて和の家に遊びに行った。

和の家は結構立派な家で和の部屋には最新型のコンピューターが置いてあった。

俺が和の家に来たのはこのコンピューターで今まで倒してきた怪人達的能力などをもう一度調べたかったからだ。

和がコンピューターの電源を入れる。

俺と唯は和のお母さんが出してくれたケーキを食べながらコンピューターが立ち上がるのを待っていた。

和「えっ！これどういうこと？」

唯「どうしたの？」

和「コンピューターの様子がいつもと違うの」

俺「どういうふうによ？」

和「画面がなんかぶれてるのよ。」

次の瞬間コンピューターの画面が黒く染まっていた。

俺「これはまさか！」

和「コンピューターウイルス！」

そのときテレビでちょうどニュースがやっていた。

ニュースによると最近自宅や会社のコンピューターがいきなりショートしたりウイルスにかかるという奇妙なことだった。

俺「またあいつらの仕業か！？」

俺達がテレビから目をそらすと突然、和のコンピューターの画面に光が映った。

画面に映っていたのはコンピューターの形をした怪人だった。

コン怪「さすがだな。もうショッカーの仕業と見抜くとは…」

俺「こんな奇妙なことするのは貴様らぐらいのもんだぜ！」

コン怪「仮面ライダー！俺に勝てるかな？」

俺「何！どういうことだ？」

コン「俺はショッカー怪人の中でも指折りの怪人だ！つまり今までのやつとはレベルが違うんだよ！」

俺「ほざけ！俺がお前を倒してやるから俺と勝負しろ！」

コン怪「では、午後一時に桜天文台の前で待っている。」

俺はコンピューター怪人と戦うことになった。

唯「あんなこと言って大丈夫なの？」

俺「ああ、俺は負けない！」

俺はバイクに乗ると天文台に急いだ。

天文台ではすでにコンピューター怪人が待ち構えていた。

コン怪「お前のデータはすでに俺の体の中にインプットされている。つまり貴様は絶対に俺に勝てん！」

俺「ふん、この世に絶対になんてないことを証明してやるよ！変身
！！」

俺は変身するとコンピューター怪人目掛けてアッパを繰り出した。

しかし、俺のアッパは軽々とやつによけられてしまった。

ライダー「俺の攻撃が当たらない！」

コン怪「お前が今アッパを繰り出す確率は85%と出ていた。」

ライダー「ならばこれならどうだ！」

俺はサンダーフォームにチェンジするとコンピューター怪人目掛け

て落雷を落とした。

しかし、落雷はコンピューター怪人に当たる前に消えてしまった。

コン怪人「俺はお前のSDの力を無力化することもできるのだ!」

ライダー「そんなバカな!」

俺はサンダーアックスでコンピューター怪人に切りかかった。

コン怪「サンダーアックスで切りかかってくる確率96%そしてその筋力から……」

やつはブツブツ言いながら俺の攻撃をことごとくかわしていた。

やつにはどのフォームの攻撃も効かなかった。

俺はどうしようもなくただもうやけくそに突っ込んでいった。

コン怪「仮面ライダー恐れに足らず!」

コンピューター怪人の殺人光線が俺に直撃した。

その瞬間俺の変身が解けてしまった。

やつはどんどん俺に迫ってくる!

どうする?仮面ライダー!

第五十二話 コンピューターの挑戦（後書き）

コンピューター怪人について

コンピューター怪人はショッカーの科学者が作り出した。

エリート怪人の一人でやつの体には仮面ライダーの攻撃パターンなどが全てインプットされている。

その上やつはライダーが持っているSDの力を無力化することができるのだ。

必殺技はコンピューター画面から放つ「殺人光線」だ。

第五十三話 必殺技を進化させろ！（前書き）

コンピューター怪人に敗れた仮面ライダーは採石場で特訓を始めた。
果たしてコンピューター怪人を倒せる必殺技は完成するのだろうか
！？

第五十三話 必殺技を進化させろ！

コンピューター怪人はかなりの実力者だった。

しかも俺のデータはやつの頭の中にインプットされているためこっちの攻撃パターンも見抜かれてしまう。

コンピューター怪人にとどめをさされそうになった俺はとっさにやつの足を引っ掛け体勢を立て直すことができた。

ライダー「コンピューター怪人！勝負はお預けだ！」

俺はマシンに乗ると天文台を後にした。

やつを倒すにはトレーニングしかない！！

俺はこの街の奥にある採石場に迎った。

ライダー「sunshineエクスプロージョン！！」

俺は徹底的に自分を鍛えた。

だが、まだやつに勝てる自信がなかった。

俺はこの採石場にある一番大きな岩に目をつけた。

俺はその岩にsunshineエクスプロージョンを放った。

しかし、岩は碎けなかった。

ライダー「ちくしょう！どうすればこの岩を砕けるんだ！！」

俺は悩んだ。

しかし、答えは出なかった。

「こんな、ここにいたんだ。探したよ。」

俺が振り返るとそこには唯がいた。

俺「よくここがわかったね。」

唯「実は和ちゃんがあのバイクに発信機を付けてたんだ。何悩んでるの？」

俺「コンピュータ怪人を倒す自信が無いんだ。今度やつと戦ったら俺は殺される！そう思ったら怖くなっちゃって。」

唯「誰だってそうやって逃げたくなるときだってあるから気にしない気にしない。」

唯は笑って答えてくれた。

俺「お前は本当にのん気だな。でもなんか少し落ち着いたよ。」

そのとき採石場に不気味な声が響きわたった。

コン怪人「ライダー今日の4時にさっきの天文台に来い！来なければこの街に殺人光線を放つぞ。フハハハ。」

そう言い残すと不気味な声は消えた。

唯「：行くんだよね？」

俺「ああ、必ずやつを倒してくるよ。」

俺はマシンに乗ると再び天文台に迎って行った。

天文台にはすでにやつがいた！

俺「変身！！」

俺は変身するとマシンにソニックSDを差した。

俺はソニックフォームになるとやつに突っ込んだ。

だが、やはりやつは俺の行動を読んでいた。

コン怪人「どうした。ライダー！それで終わりか？」

ライダー「見せてやる！仮面ライダーの力を！！」

俺はソニックタイマーのスイッチをいれると更にライドアップSDをセットした。

コン怪人「馬鹿め！sunshineエクスプロージョンは俺には効かんぞ！！」俺は音速状態でコンピューター怪人の周りを走り回った。

コン怪人「何をしようと無駄だ！」

次の瞬間のことだった。

コン怪人「仮面ライダーが2人いや3人に見えるぞ！これはいったいどういうことだ！？」

ライダー「今だ！ソニックエクスプロージョン！！！」

一発よけられるなら当たるまでかましてやる！！

コンピューター怪人は最初のうちは俺の全てのキックをかわしていたがじきによけきれなくなりとうとう連続キックをやつに当てることができた！

コン怪人「くそーライダーめ！俺のデータに間違いは無いはずだ」

やつは大爆発を起こし消えていった。

ライダー「：俺は：勝ったんだな」

俺は強く自分の拳を握りガッツポーズを決めた。

唯が天文台に駆けてやってきた。

唯「やったね！勝ったんだね！」

ライダー「ああ、ありがとう唯。」

俺は唯にお礼を言った。

今思えば唯の言葉がなかったらまた負けていたかもしれん。

俺はマシンの後ろに唯を乗せると街に向かい走っていった。

第五十三話 必殺技を進化させろ！（後書き）

新必殺技「ソニックエクスプロージョン」

ソニックフォームから繰り出す「ソニックエクスプロージョン」は普通の「sunshineエクスプロージョン」と違って音速状態で放つため合計50発連続で相手にキックをくらわすことが可能である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6786w/>

仮面ライダーSunshine

2011年11月2日01時06分発行